# ドン＝カルロ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドン＝カルロ

【Ｎコード】
Ｎ３３４０Ｆ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
スペインの王子ドン＝カルロ。結ばれる筈のエリザベッ他派父王フェリペ二世の妻となり絶望の中にいた。その彼を奮起させようとポーザ侯ロドリーゴはフランドル救済に彼を誘う。だがそれは彼を暗澹たる運命へと引き摺り込むことになる。シラーの戯曲、ヴェルデイのオペラを小説にしました。
こちらにも掲載してもらっています。
ｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｐａｉｎｗｅｓｔ．ｎｅｔ／

## 第一幕その一

第一幕　フォンテブローの森

フランスの冬は寒い。雪が世界を覆い狼の咆哮が聞こえてくる。夜は長く太陽が顔を出す時間は短い。その中でも森は特に寒い場所であった。

遠くに宮殿が見える。宮殿といっても城の大きいものである。この時フランスはようやく文化や文明というものについて微かに知った時である。

その中で樵達は木を束ねている。そしてそれを着飾った人々に差し出している。

「ご苦労」

その中の一人が言った。そして彼等に金貨を手渡す。

「もっと多く」

その中心にいる一際みやびやかな服に身を包んだ貴婦人が言った。

「ハッ」

先程樵に金貨を手渡した女はさらに多くの金貨を渡した。樵達はホクホクした顔でその場を立ち去った。

見れば中央にいるその女性は驚く程の美貌を持っている。金色の黄金をそのまま溶かしたような髪に湖の様に澄んだ蒼い瞳をしている。やや細長いその顔は雪の様に白く鼻は高い。そして長身をその豪奢なドレスで覆っている。

彼女達もその場をあとにした。それを木の陰から見る者がいた。

「あれがエリザベッタ＝ド＝ヴァロアか」

それは一人の線の細い青年であった。

背はあまり高くはない。赤い絹の服とズボンに身を包んでいるがそこからも華奢な身体つきがわかる。背こそそんなに低くはないがその身体つきが彼を実際よりも小柄に見せている。

その白い顔もやはり細い。黒い瞳の光も強くはなくどこか青白い。

細く黒い髪も豊かだが何処かまとまりを欠いている。
ヴァロア家とは当時のフランス王家である。欧州においてはハプスブルグ家と並ぶ名門であり長い間不倶戴天の間柄にあった。これは家同士の関係もあったがフランスとドイツ、スペインの宿命とも言える対立が根源にあった。
欧州の歴史は戦乱と権謀術数の歴史でもあるがその中でもハプスブルグ家とこのヴァロア家、そして後のブルボン家の役割は非常に大きいものであった。彼等はことあるごとに対立し常にいがみあってきた。そしてそこにイギリスや他の国が入ってくるといったものであった。当時のイギリスもまだイングランドという小国に過ぎなかった。欧州の覇の主役はこのハプスブルグ家とヴァロア家であった。
だがそれでも時には周囲の状況の必然性から手を組むこともあった。そうした場合のハプスブルグ家の得意とする方法は婚姻政策であった。
『戦争は他の者にやらせておけ。幸運なるハプスブルグ、汝は結婚せよ』
こうした言葉がある。ハプスブルグ家は婚姻により勢力を拡げていった家である。
彼等の特徴は言語に巧みで外交センスに恵まれていたこと、そして非常に長寿の人物が多かったことである。彼等は生きることにより勢力を伸ばし子をもうけていったのだ。これは後々まで続きオーストリアの偉大なる女帝マリア＝テレジアの頃にもあった。
そして彼等の血筋は遺伝が非常に強かった。少なくとも片方の親ははっきりとわかる程であった。
鷲鼻で丸い瞳をし面長。そして唇は厚く下顎が出ている。これは後にロココの女王マリー＝アントワネットにまで受け継がれる。恐るべき遺伝であった。
それはこの若者にも見られた。やはり瞳は丸く面長で鼻は高い。そして唇は厚く下顎が出ている。彼の名はドン＝カルロ、スペイン

王フェリペ二世の嫡子である。
彼の母はポルトガル王女マリア＝マヌエラであった。彼女の母はフェリペ二世の父カール五世の妹であった。すなわち従兄妹同士の結婚であった。これは政略結婚の多い欧州ではよくあったことである。
だがこの母親は若くして亡くなった。次に父が結婚したのはイングランドの女王メアリー一世である。
彼女はまたの名を『ブラッディ＝メアリー』という。我が国の言葉に直すと『血塗れのメアリー』となる。何とも物騒な通り名であるが実際に彼女は多くの者を殺した。宗教の名においてだ。
彼女は狂信的なカトリックの信者であった。そして新教徒と見ると片っ端から拷問にかけ火炙りにしたのである。遂には腹違いの妹エリザベス、後の処女王エリザベス一世までその手にかけようとした。
これを夫であるフェリペ二世は快く思わなかった。彼もまた熱心なカトリックの信者であったが国王としての分はわきまえていた。彼は度を過ぎた弾圧は好ましくないことをよくわかっていたのである。
この時代からフェリペ二世の評判は今一つ芳しくはなかった。
『ピレネーの南には魔物が棲む』
これは当然フェリペ二世のことを言っているのである。しかし実際の彼は確かに弾圧こそすれ度を過ぎたことは好まなかった。それどころかドイツにいる同門の者達の行き過ぎた惨たらしい所業に対し眉を顰めていた。
元々彼の本拠地であるスペインは圧倒的多数がカトリックの信者であった。カトリックの膝元であるイタリア諸国やフランスよりもその割合は多かった。
その為新教徒の存在はあまり気にならなかった。ネーデルランドは別にしてもだ。彼は植民地の統治もそれ程惨たらしくはなかった。少なくとも後年のイギリスやフランスの統治よりは遥かにましであ

った。といっても我が国のように学校を建てたりインフラを整備してその地の文化を教えようという発想はなかったが。これは植民地統治としては根本から間違っているがここでは多くは語らないことにしよう。

彼は少なくとも分別を知る統治者であった。その為緩めるべきところも締めるべきところもわきまえていた。そして国内の何事に関しても目を向け耳を傾けてきた。そうした人物であった。

## 第一幕その二

彼のそうした性質は父カール五世から受け継いだと言われている。彼は一身に神聖ローマ帝国という国を背負い常に動いていた人物なのである。

ここにいる彼は父のそうした性質をい受け継いでいるであろうか。少なくとも外見からはそうは思えない。やはり虚弱な感が否めない。

彼の名はカルロという。ドン＝カルロ。それが彼の名であった。その繊細な性質と頼りなげな外見から宮廷の女性からは人気があるが謹厳な国王からは今一つ快く思われてはいなかった。

「この広い森でこんなに早く彼女に出会えるとは」

彼は木の陰から姿を現わして言った。８６

「それに素晴らしい景色だ。このように凍てついた森は今まで見たことがない」

彼は長い間マドリッドの宮殿の中にいた。その地は暑く雪はあまりない。そしてこのような森なぞ見たこともなかったのである。

「父上に逆らってまで大使の随員に身をやつし見ることができた我が妻となるべき方。今まで思い焦がれ、そしてこれからも恋の炎のこの身を燃やすことのできる方だ。私はあの方のお姿を見ることでそれを確信することができた」

彼は喜びをその全身に露わにして言った。

「これから私は愛に生きるのだ、今まで空虚だった世界がまるで春の美しい空に包まれたようだ」

彼はエリザベッタの去っていった方に向かおうとする。だが足を止めた。

「いや、待て」

彼は自分に言い聞かせた。

「もう夜になっている」

見れば森の木々から見える空は夜の帳に覆われている。星が空に

輝いていた。そこで森の中から声が聞こえてきた。
「魔物か！？」
違った。それは人の声であった。
「人か」
だがカルロは身を隠した。そして声の主達がこちらにやって来るのを感じた。
「皆来てくれないか！？」
見れば先程の王女の一行である。その中の一人が王女をその腕で支えている。
「一体どうしたというのだ！？」
カルロはそれを見て首を傾げた。
「まずいですわ、もう夜になりましたわ。これでは道がわかりませんわ」
王女を支える侍女が困った顔をしていた。
「王女様、私共が何とか致しますから」
彼等は王女を切り株に座らせて王女に対し畏まって言った。
「気を落ち着け下さい」
やがて先程の樵達も戻ってきた。
「はい」
王女はその言葉に答えた。無論彼女とて不安に苛まれている。夜の森の中程危険なものはない。熊や狼、そして妖精や魔物達が蠢いているのだから。
「もし」
カルロはそんな一行の前に姿を現わした。
「誰です！？」
一行は彼の姿を見て身構えた。
「御心配なく」
彼は彼女達に対して優しい声で語りかけた。
「私はスペインから来た者です」
「スペイン！？」

一行はその言葉に目を皿のようにした。
「はい、今回の大使の随員として参りました」
「というとレルム伯爵の随員のお方ですか！？」
「はい」
カルロは答えた。一行はその言葉に胸を撫で下ろした。
「よかった、一時はどうなることかと思いましたよ」
彼等はカルロの偽りの素性を知り胸を再び撫で下ろした。
「王女様の御命を狙う輩がいないとも限りませんしね」
「まさか」
「いえ、例えばフランドルの者とか」
「フランドル・・・・・・」
その地の名は彼もよく知っていた。今スペインに反旗を翻している土地だ。彼等はイングランドと結託し独立しようと画策しているらしい。
「我がフランスと貴国の同盟が成れば彼等は窮地に陥ります。ただでさえ南部が同盟から離脱しようとしているのですから」
「そうでしたね」
今フランドルでは新教と信じる彼等と旧教を信じるスペイン軍との間で血生臭い戦いが行なわれているのである。

## 第一幕その三

「王女様とそちらの王太子殿下のご結婚が成れば我等両国の関係は磐石のものとなります。我々はそれを是非とも成功させねばなりません」

「それは心得ています」

カルロは胸に手を当てて頭を垂れた。

「それでは私達は宮殿に戻ります。陛下にお伝えしなければならないことがありますので」

そう言って彼等は退場しようとする。

「殿下も」

そしてエリザベッタにも共に来てもらおうとする。だが彼女はそれに対し首を横に振った。

「もう少しここにいさせて下さい」

「そのような我が儘は・・・・・・」

彼等は困惑した顔で彼女を宥め言い聞かせようとする。だが彼女はそれを聞き入れようとしない。

「心配は無用です。こちらの方がおられますので」

そう言ってカルロを手で指し示した。

「それでしたら」

彼等は折れた。そして王女とカルロを残してその場を後にした。

「さて」

エリザベッタはカルロに顔を向けた。

「スペインの方にお聞きしたいことがあります」

「はい」

カルロはエリザベッタの言葉に対し一礼した。

「貴国の殿下は素晴らしい方とお聞きしておりますが」

「はい」

「一体どのようなお方ですか？」

「それは・・・・・・」
彼はエリザベッタの前に跪いた。そして枯れ枝を拾うふりをした。
「？」
エリザベッタはそれを見て不思議に思った。
「戦場ではこうして焚き木を拾い集め火を起こします。これは普通下々の者がすることです」
「そうなのですか」
「はい、ですが殿下はこれをご自身のぶんはご自身で為されます」
「まあ・・・・・・」
エリザベッタはカルロのその言葉に感銘を覚えた。
「それがスペインの慣わしです。陛下も殿下もご自身の身の周りのことは全てご自身で為されます」
それは事実であった。フェリペ二世は質実剛健を尊ぶ生真面目な人物であり贅沢を好まなかったのだ。
「それにこの炎を御覧下さい」
彼は火打石で火を点けた炎を指差して言った。
「戦場ではこの様によく燃えると勝てるとも新しい恋が得られるとも言われております」
「それはよいことです」
エリザベッタはその言葉に機嫌をよくした。
「もしかすると今夜にもスペインと我がフランスの間に講和が結ばれるかも」
「そうなれば王女様は我が国の殿下と結ばれることになるでしょう」
「はい・・・・・・」
エリザベッタはカルロのその言葉に顔を赤らめさせた。
「あとはあの方が私を愛して下さるかどうか」
「それは御心配なく」
カルロは答えた。
「殿下は貴女様を必ずや気に入られることでしょう」
「それならば」

エリザベッタはその言葉に益々機嫌をよくした。
「私はこの生まれ育った祖国を離れ異国へと嫁ぎます。その時その地に希望がなければどんなに哀しいことか」
「スペインに絶望はありません」
そう、この時まで彼は絶望というものを知らなかったのだ。
「これは私が誓って言います。殿下は貴女様を深く愛されることでしょう」
「何と嬉しいこと」
「はい、そしてこれがその証です」
カルロはそう言うと懐から小さな箱を取り出した。それは宝石箱であった。
「それは・・・・・・」
「殿下からの贈り物です」
彼はそう言うとその宝石箱を手渡した。
「この中に殿下の似顔が入っております」
「この中に・・・・・・」
エリザベッタはそれを恐る恐る手に取った。
「どうぞ」
カルロの言葉に押され手に取った。そしてゆっくりと開いた。
「あ・・・・・・」
エリザベッタはその似顔を見て絶句した。何とそこに映っているのは今目の前にいるその若者であるのだから。
「私がそのカルロです」
カルロはここでようやく名乗りをあげた。
「お慕いもうしております」
そして片膝を折ってエリザベッタの前に跪いた。
「貴方が・・・・・・」
エリザベッタは震える声で言った。
「はい」
カルロは跪いたまま答えた。

「これこそ神の御導き」
エリザベッタは声を震わせたまま言った。
カルロはその前に跪いたままである。一言も語ろうとはしない。
「立って下さい」
彼女はそんなカルロを立たせた。カルロはそれに従い立ち上がった。
「まさかこの様なところで出会うとは。このフォンテブローの森には一つの言い伝えがあります」
「それはどのような？」
「この森ではじめて出会った男女は永遠の愛を結ぶという言い伝えです。そして私達は今ここではじめて出会いました」
「それは・・・・・・」
カルロはその話を聞き顔を明るくさせた。その時大砲の音が聞こえた。
「ムッ」
「あっ」
二人はその音が鳴った方に顔を向けた。
「祝砲ですね」
「はい」
エリザベッタはカルロの言葉に頷いた。見れば宮殿のテラス一面に明かりが灯っていく。闇夜の中にテラスの色とりどりの光が映し出される。

## 第一幕その四

「御覧になって下さい、宮殿があんなに明るく」
エリザベッタはカルロに顔を向けて言った。
「はい、何と美しい」
カルロはその光を見て曇りのない顔で答えた。
「これで我々は永遠に結ばれることとなったのです」
「はい、私は貴方の国に希望と共に参ります」
二人は互いの顔を見やって言った。そこに先程の従者達が戻ってきた。
「姫様」
そして彼等はエリザベッタの下に跪いた。
「はい」
エリザベッタは喜びの表情を打ち消して謹厳な表情で従者達に向き直った。
「よいお知らせです」
その中の一人が言った。
「どのようなものですか？」
聞かずともわかっていた。彼女は喜びを内心に押し殺しながらそれを聞いていた。
「めでとうございます、姫様は結婚なさることになりました」
「はい」
思わず笑みが顔にこぼれそうになる。それを覆い隠すのに多大な努力が必要であった。
「姫様はスペイン王フェリペ二世陛下のお妃になられるのです」
「え！？」
これにはエリザベッタもカルロも目を点にさせた。
「何かの間違いではないですか！？」
エリザベッタは従者達に対して言った。

「何がでしょうか！？」
従者達もキョトン、として顔を上げた。
「私の結婚の相手です」
彼女は狐につままれたような顔で言った。
「私はカルロ殿下と結婚する筈ですが」
「予定が変わったのです」
従者達は落ち着いた声で言った。
「そんな・・・・・・」
その言葉にエリザベッタもカルロも顔を青くさせた。
「父君が決められたのです。フェリペ二世陛下には今奥方がおられないので」
この時フェリペ二世は独身であった。彼の二番目の妻イングランド女王メアリー一世はこの時既にこの世を去っていた。
「何ということ・・・・・・」
だが皆二人の青くなった顔に気付かない。喜びでそうなっているのだと思った。
「まあそんなに驚かれないで。スペイン王はとても真面目な方だそうですよ」
従者達はエリザベッタを宥めた。そして小姓や従僕達が姿を現わした。
民衆達もいる。彼等は口々に王女を称えた。
「姫様、おめでとうございます。この度のご結婚はフランスとスペインに平和と繁栄をもたらすことでしょう」
そうであった。この結婚には両国の運命がかかっているのだ。それがわからぬエリザベッタやカルロではなかった。彼等もまた王家の者なのだから。
「これから姫様は玉座にお登りになられます。そしてスペインをその御心で照らされることでしょう」
「有り難うございます」
彼女は何とか平常心を保ちつつそれに笑顔で応えた。だがその顔

はまだ青いままである。
「何という惨い運命だ」
カルロは思わず呟いた。だがそれに気付く者はいない。
王妃の側近である一人の貴婦人が出てきた。モントーバン伯爵夫人である。
「姫様、お喜び下さい。お父上が姫様を偉大なスペインと新大陸の王の妃になさることを決まられたのです」
どうやらこれはエリザベッタの父が決めたことであるらしい。
「スペインとフランスの長い戦争もこれで終わります。そして両国はこれより平和の歴史を歩むのです」
両国の平和、それを言われて拒めるエリザベッタではなかった。
「このご結婚、受けられますね？」
「・・・・・・はい」
断ることはできなかった。それは彼女が最もよくわかっていた。
「これで両国に平和が訪れます」
「平和だ、平和だ！」
民衆が喜びの声をあげる。それは心からの声だった。
その声が森に満ちるエリザベッタとカルロはその声自体はよかった。だが今の惨たらしい運命に二人は絶望の奥底に叩き込まれていた。

## 第二幕その一

第二幕　ユステ僧院

ハプスブルグ家には名のある君主が多い。その祖である神聖ローマ帝国皇帝ルドルフ一世をはじめとして中世最後の騎士と謳われたマクシミリアン一世、後のオーストリア中興の祖マリア＝テレジア、オーストリア＝ハンガリー帝国皇帝フランツ＝ヨーゼフ帝等である。その中でもフェリペ二世の父であるカール五世の名は特に有名である。

神聖ローマ帝国皇帝として君臨していた。フランスやトルコと戦いルター等新教徒達と渡り合った。彼はその双肩にドイツとスペインを抱え、それを見事に支えていたのだ。

だがその彼も今はこの世にはいない。スペインマドリードにあるこのユステの僧院に静かに眠っている。

僧院の中には礼拝堂がある。カール五世の好みであろうか、豪奢ではない。むしろひっそりとしている。政治に疲れた彼はその位を息子であるフェリペ二世と弟であるフェルディナント一世に譲った後この僧院に隠棲し余生を送ったのである。

金箔で塗られた鉄格子の奥に墓がある。カール五世の墓だ。彼は今この地にいるのである。

「偉大なるカルロス五世よ」

僧達が亡き王に祈りを捧げている。カルロスとはカールのスペイン語読みである。

「今は最早この世にはない。今はその素晴らしき志と業績を偲ぶだけである」

「そう、陛下はまことに偉大であられた」

僧の一人が言った。

「だがそれも志半ばであった。今陛下は神の許におられる」

「今は陛下のご冥福をお祈りするばかり。天界にあっても我等が王

とこのスペインを御守り下さい」
祈りは続く。そこに一人の若者がやって来た。
「お爺様への祈りか」
それはカルロであった。
「ここはお爺様がその人生の最後を送られたところだ。疲れきったその御心の平穏を望まれた場所」
カルロは礼拝堂の祖父の墓を見ながら呟いた。
「今もこの場所におられる。そして」
言葉を続けようとする。その時だった。
「人の子の安らぎは神の御許にしかない。人の苦しみはこの世にある限り続くのだ」
そこに一人の年老いた僧が通り掛かった。
その僧は顔をすっぽりとフードで包んでいる。顔は見えない。だがその声はしわがれ低いものであった。
「今の声は・・・・・・・!?」
カルロはその声に聞き覚えがあった。
「そんな筈はない。お爺様はもうこの世にはおられぬのだから。いや・・・・・・」
カルロはここで一つの噂を思い出した。
「まだこの世におられるというが。僧衣の下に王冠と黄金の甲冑を着込まれて」
青い顔をして先程の僧侶の方を振り向く。だがそこにはもういなかった。
「消えたか。行ってしまったようだ」
だがその時遠くから声がした。
「安らぎは神の御許にしか存在しない」
あの僧の声だった。そして声は消えていった。
「まるで私に語りかけているようだ。何と無気味な声だ」
彼は声を耳に留まらせたまま呟いた。
そこに見習いの若い僧侶に導かれて一人の青年がやって来た。

「殿下、こちらにおられましたか」
「ロドリーゴ・・・・・・」
カルロはその青年の方を振り向いた。
その青年はカルロとは対照的に大柄で筋肉質であった。顔はやや細長いながらも彫りが深く整っている。長く黒い髪を帽子の下にまとめている。その瞳は黒く力強い光を放っている。
青い絹の豪奢な服に身を包んでいる。彼の名はポーザ侯爵ロドリーゴ、フェリペ二世の腹心にしてカルロの幼い頃からの友人でもある。
「どうしてここい！？」
「殿下にお話したことがありまして」
「そうか」
彼等は若い僧に金を手渡しその場を去らせた。その場には二人だけとなった。
「そして話というのは？」
カルロはロドリーゴに対して問うた。
「殿下がお悩みとお聞きしましたので」
ロドリーゴは謹んで答えた。カルロはその言葉に表情を暗くさせた。
「・・・・・知っていたのか」
彼は顔を下に俯けた。
「何が理由かまでは存じませんが殿下のご様子から」
「否定はしない。だが訳は聞かないでくれ」
「はい」
ロドリーゴは答えた。
「話はそれだけではないだろう？君も何か言いたそうだ」
カルロはロドリーゴの顔を窺って言った。
「はい、殿下に是非ともお話したことがありまして」
ロドリーゴは表情を深刻なものにした。
「何だい？」

「私は先日までフランドルに行っておりました」
「それは知っているよ。活躍したそうだね」９６
彼は将軍としても有名であった。
「はい、ですが・・・・・・」
ロドリーゴは自身の武勲を称えられても表情は暗かった。
「一体どうしたんだい！？そんなに表情を暗くさせて」
カルロは彼のあまりにも冴えない表情を見て自分も表情を暗くさせた。
「・・・・・・殿下、今フランドルで何が起こっているかご存知でしょうか」
「我がスペインに対する反逆だろう」
彼は率直に言った。そう聞かされていた。
「・・・・・・ちがいます」
ロドリーゴは暗い声で言った。
「では一体何なんだい！？私には君の話がよくわからないのだが」
「今フランドルは地獄と化しています。我々の弾圧によって」
「何っ、それは本当かい！？」
フランドル、今はオランダと呼ばれる地方は婚姻政策によりハプスブルグ家の領地であった。かってこの地はフランスと所有を巡り激しく対立したこともある。商業の栄えた地であり今はスペイン領でありスペインの重要な税の収入源であった。
商業が盛んな為商工業者の力が強い。ここで宗教の問題が絡んでくる。

## 第二幕その二

長い間欧州の教義はローマ＝カトリックにより統一されていた。他の考えを持つ者達は異端として惨たらしい刑罰により抹殺されてきた。アルビジョワ十字軍によるフランス南部に勢力を持っていたカタリ派への徹底した殺戮は有名である。これは当時の法皇インノケンティウス三世が政治的判断によりカタリ派の財産を討伐軍のものにすることを許したことも背景にあった。シモン＝ド＝モンフォールという男は人々の目をくり抜き顔の皮を剥ぐという鬼畜の如き行いを続けていた。

教会に対する批判も許されなかった。教会の腐敗を批判したボヘミア大学教授フスは異端と判決され火刑に処された。フスは自身が焼かれる前にその目の前で自らの書を焚書された。これは極めて屈辱的なことであっただろう。

異なる考えも批判も許さない。そして富も権力も独占している。これで腐敗が進まない筈がなかった。フッガー家やメディチ家のような欧州の勢力を持つ家が教皇を輩出し更に力を誇示した。そして腐敗はいくところまでいっていた。

遂に自らの寺院サン＝ピエトロ寺院を建設する為の費用を調達する為に『免罪符』なるものを発布した。これを買えば罪が許されるというものである。教会の自浄能力など最早なかった。しかも彼等は領民から好きなだけ金を搾り取っていた。神聖ローマ帝国などは『教会の牝牛』と呼ばれていた。絞れば絞る程金が出るというわけである。

これに異を唱える者が遂に現われた。ドイツの宗教家マルティン＝ルターである。

世話焼きで人間臭い男であった。ビールの害毒について何時間も講義しておきながらそのビールが大好きであった。修道女達の結婚を世話してやり残った最後の一人と公に結婚し多くの子供達に囲ま

れた。彼は実に子煩悩な父親でもあったのだ。
そして強い正義感の持ち主であった。彼は教会の腐敗を公然と批判した。修道女との結婚もその意があった。聖職者の公式の結婚は認められていなかったのだ。しかし隠し子を持つ者は非常に多かった。教皇ですらそうであった。彼はそれに対した批判をしただけであった。しかしそれを許すような教会ではない。
彼は破門に処された。教会の切り札である。一国の王ですらこれには対抗できない。
しかし彼はそれを完全に無視した。そして批判を続けた。
業を煮やした教会は援軍を頼んだ。ルターのいる神聖ローマ帝国の皇帝カール五世に対してである。彼は神聖ローマ帝国の皇帝としてそれを了承した。一説にはルターの主張に対しても理解していたようであるが立場がそれを許さなかった。何故なら神聖ローマ帝国はフランク王国に次で教皇に冠を授けられた国である。教会の保護者なのであるから。
ウォルムスにて会議が開かれることとなった。当然ながらルターも呼ばれた。カール五世は彼に今までの発言を撤回するように言った。しかしルターはそれを拒絶した。
これに対してカール五世も断固たる処置をとらざるをえなかった。彼を法律の保護外に置いたのである。これは生命を保証しないということであった。ルターはそれにも臆するところがなかった。しかし絶体絶命であることは事実である。そんな彼に手を差し伸べる者が現われた。
選帝侯の一人ザクセン公爵である。彼は以前よりハプスブルグ家の権限が強まるのを好ましく思っていなかった。その為ルターを匿ったのである。
ルターはそこで聖書をドイツ語に翻訳した。それまではラテン語で書かれているものだけであったが彼はより多くの人が聖書を読む為に翻訳したのである。そしてそれをグーテンベルクの金属製の活字印刷が広めていった。これが大きなうねりとなる。

やがてルターの教えを信じる者達が立ち上がるようになった。そして戦争を起こした。ドイツ農民戦争である。

ルターは最初はそれを指示していた。だが農民の行動がこれまでの摂理を乱すものだと批判するようになった。これはこの戦争の指導者トマス＝ミュンツァーの主張をルターが過激過ぎると判断したからだという。彼は農民を抑えるように主張した。それがルターの限界だったかも知れない。しかし彼の果たした役割は大きくその考えに賛同する者が多く現われたのである。

カルヴァンもそうであった。彼はスイスで活動を続けたがその主張はルターよりも過激でかつ厳格であった。

予定説、人の運命は神によって既に定められているというものである。これはさしものルターも途中でその主張を撤回せざるをえない程のものであった。何故ならこれでは救いなど語れなくなるからだ。

しかしカルヴァンはこう言った。人間は与えられた仕事を真面目に働けばよいのだと。それこそが神の意志であると。それが出来ている人間は救われているのであると。

これはこうも解釈できた。蓄財はいいことだと。カルヴァンはそれを肯定した。働いて金を稼ぐことの何が悪いのか、と。

これは画期的な主張であった。それまでキリスト教においては蓄財は悪と考えられてきた。スコラ哲学を大成させたトマス＝アクィナスはこれを罪悪とは考えなかったが大方はそうであった。そうした考え方を一変させたのであった。

この考えは都市の商工業者に支持された。そして彼等はカルヴァン派に改宗していった。

フランドルは商工業の発達した地域である。ならばカルヴァン派が増えるのも当然であった。こうして彼等はスペインのカトリックとは考えを異にするようになったのである。

これに対しフェリペ二世は強硬策に出た。生真面目で潔癖症なところがある彼はそれを許さなかったのだ。ハプスブルグ家の者とし

てもである。彼等はカトリックの擁護者、神聖ローマ帝国皇帝家なのだから。
フランドルの弾圧は熾烈を極めた。それに対しフランドルの者達も徹底的に戦った。こうしてこの地は血に染まっていったのである。
「そうだったね、彼等は新教徒だったんだ」
カルロはロドリーゴの話を聞いて頷いた。
「そうなのです、その為にあの地では何時果てるともなく戦いが続けられているのです」
ロドリーゴは悲痛な面持ちで言った。
「しかし君もカトリックだろう？何故そんなに悲しむんだい」
カルロは首を傾げて問うた。
「我々にとって彼等は敵だ。敵を倒さなくてどうするというのだい？」
「殿下、お言葉ですが」
ロドリーゴはそんな彼の主張に対して首を横に振った。
「彼等は考えの差こそあれど我々と同じなのです。彼等もまたこの双頭の鷲の下にいる者達なのです」
双頭の鷲、それはハプスブルグ家の紋章である。本来は神聖ローマ帝国の紋章であったが何時しかハプスブルグ家の紋章としても知られるようになった。
「それならば慈愛を持って対応するべきではないのでしょうか。それこそが彼等の、そして我がスペインの為であると存じます」
「つまり彼等の信仰を認める、ということだね」
「お言葉ながら」
ロドリーゴはそう言って頭を垂れた。

## 第二幕その三

「だが私にはそれをどうすることも出来ない」
カルロは頭を振って言った。
「それが出来るのは父上だけだ。しかし・・・・・・」
父が自分の言葉を聞き入れてくれるとは到底思えなかった。普通の父子とはあまりにも関係が違い過ぎた。父は王なのである。そして自分はその後継者だ。彼は子である前に彼の後継者でありまた家臣であったのだ。父は彼に対して常にそう言ってきた。
「いえ、殿下だからこそ出来るのです」
ロドリーゴは表情を暗くさせるカルロに対して言った。
「私だから！？」
カルロはその言葉に顔を上げた。６０
「そうです、我が国の後継者である殿下だからこそお出来になるのです。フランドルの民衆を救うことが」
「一体どうやって・・・・・・」
カルロはその言葉に対し狼狽した。
「殿下がフランドルへ行かれて直接政治を執られるのです。そうすればフランドルに無益な血が流れることもなくなるでしょう」
「しかし私にそんなことが・・・・・・」
彼には自信がなかった。虚弱でいつも父の影に隠れていた自分にそんなことが出来るとはとても考えられなかった。
「できます、殿下には素晴らしいお力が備わっております」
だがロドリーゴはそんな彼に対してあえて言った。
「王としての在り方はそれぞれです。殿下は殿下のその優しいお心を使われればいいのです」
「それでいいのだろうか」
「はい。そうすれば神はきっと殿下を御導き下さるでしょう」
ロドリーゴはカルロを励ますようにして言った。

「それなら」
カルロは顔を上げた。
「行こう、フランドルへ。そして血の海の中にあえぐあの地の者達を救おう」
「はい、皆殿下をお待ちしております。彼等をお救い下さい」
ロドリーゴは強い声で言った。
「ロドリーゴ」
カルロはそんな彼の名を呼んだ。
「それには補佐が必要だ」
「はい」
「私には君が必要なんだ。来てくれるかい」
「当然です、私の命は今より殿下に捧げます」
彼はそう言って片膝を折り彼の前に跪いた。カルロはそんな彼を立たせて言った。
「有り難う、では私達はこれから死ぬまで一緒だ」
「はい、フランドルを救う為に」
彼等は強く抱き締めあった。そして右腕を絡み合わせ誓った。
そのユステの寺院の前である。質素な僧院であるがその前には緑の芝生が生い茂っている。オレンジや乳香樹の木々が生い茂っており向こう側には青い山が見える。特に整備されているわけではないが美しい場所である。
そこに宮廷の女官達が集まっている。この場所は彼女達にも人気があるのだ。
「やはりここはいいですね」
彼女達はオレンジの木々を眺めながら言った。
「ええ。宮仕えの気苦労を癒すには一番ですわね」
彼女達は小姓達の奏でるマンドリンを聞きながらその場に座りゆったりと佇んでいる。そこに一人の濃い赤の豪奢な服に身を包んだ若い女性がやって来た。
「皆様、こちらにいらしたのね」

彼女は女官達を見つけると優雅に笑った。
黒い髪と瞳を持つ美女である。美しいことは美しいが何処か苛烈そうである。エリザベッタの美しさが鹿のものだとすると彼女のそれは豹のものであった。肌は白いく透き通っているがその白さにも何故か棘がある。仕草の一つ一つが外に向けられておりピリピリとしている。顔付きもきつくそれが彼女を近寄りがたいものにしている。
「エボリ公女」
女官達は彼女の姿を認めてその名を呼んだ。彼女は宮廷ではその名を知らぬ者はない女性であった。
軍人として名を馳せたエボリ公爵の妹である。幼い頃から美しく勝気な少女として知られ今では兄と共に王の側近として宮廷にいる。王妃とも親しくその良き相談相手である。
「皆様、ご機嫌よう」
公女は彼女達に対して微笑んで挨拶を返した。
「今日は素晴らしい天気ですわね」
微笑んだその顔は美しい。だがやはり何処か激しさを秘めている。
「本当に。毎日こんな日ばかりだといいのに」
女官の一人が笑顔でそう言った。
「けれどそんな日ばかりだと飽きてしまいますね。雨も降るから余計に太陽がいとおしくなるものですよ」
公女はそんな彼女に対して言った。
「ところで殿下はどちらですか？」
彼女はカルロのことについて尋ねた。
「殿下でしたら僧院の中ですわよ」
女官の一人が答えた。

## 第二幕その四

「そうですか」
公女はそれを聞いて頷いた。
「それでは殿下をお待ち致しましょう。こちらから出向くのは失礼ですし」
そしてマンドリンを持つ小姓の一人に顔を向けた。
「マンドリンを」
「はい」
小姓はそのマンドリンを差し出した。公女はそれを受け取った。
「私の歌でも披露させて頂きましょう」
「本当ですか！？」
彼女は宮廷でも有名な歌の名手である。皆その言葉を聞き目を輝かせた。
「はい。今日は喉の調子がよろしいので」
そして彼女はマンドリンを両手に抱えた。
「どの曲がよろしいですか？」
皆に尋ねた。
「ヴェールの歌を」
「わかりました」
彼女はそのリクエストに答えると静かにマンドリンを弾きはじめた。そして口を開いた。
「ではいきますよ」
「はい」
彼女は歌いはじめた。
「グラナダの王様の宮殿のお話です。宮殿の睡蓮のお池のほとりに一人の女の人がおりました」
「その方はどなたですか？」
女官達はあえて聞いた。

「その方は厚いヴェールを被っておりました。その方は王様の前にまるで蜃気楼のように姿を現わされたのです。星降る夜の下に」
「まるで夢か幻の様なお話ですね」
「はい。その方を御覧になった王様は一目で心を奪われました。そしてその方に語りかけたのです。『美しい人、私と共に暮らさないか』と」
「けれど王様はお一人なのですか！？」
「いいえ。王様にはお妃様がおられました。けれども恋の炎だけはどうしようもなかったのです。これも全て厚いヴェールの魔力なのでしょうか」
「不思議なヴェールですね。本当に魔力が備わっていたのでしょうか？」
「それはこれからわかること。ヴェールは全てを覆い隠すものなのですから」
　彼女は歌を続けた。マンドリンの音がさらに響く。
「王様はまた仰いました。『この庭はどうも暗い。おかげで貴女のその髪も顔も見えはしない。だが私にはわかる。貴女はこの宮殿に舞い降りた天女だ。さあそのヴェールを取ってくれ』」
「大胆な。それでその方はどうされたのですか？」
「何も答えられませんでした。ただ王様のお話をお聞きになっていただけです」
「まあ、恥ずかしかったのかしら」
「ですが王様があまりに強く望まれるので遂にそのヴェールをお取りになりました。さあ、ヴェールの下にはどなたがいらしたでしょうか！？」
　公女はそこで女官達に顔を向けて微笑んで問うた。
「どなたですか！？」
　女官達は尋ねた。
「お聞きになりたいですか？」
　公女は再び問うた。

「はい、是非とも！」
女官達は言った。
「それでは」
公女は妖艶に微笑んで歌を再び歌いだした。
「そこにはどなたがいらしたでしょう。何とそこには」
「そこには！？」
「お妃様がいらしたのです、お妃様は驚く王様にお顔を向けられて仰いました。『王様の申し出、謹んでお受け致しますわ』と」
「まあ、それはそれは」
女官達は囃し立てるように言った。
「これは全て王様の浮気心を懲らしめる為にお妃様の計画でした。王様は以後お妃様をこれまでより大切になされたというお話です」
「それもこれもヴェールのおかげですね」
「そうです、ヴェールには不思議な魔力が備わっているのですよ」
公女は歌った。
「皆さん、殿方の心を我がものにしたければ」
「ヴェールの魔力を借りるのが一番ですね」
「そういうことです！」
彼女達は歌う。そこにエリザベッタがやって来た。彼女も僧院に参りに来たのだ。
「王妃様！」
皆彼女の姿を見て頭を垂れた。
公女もである。だがその物腰は何処か彼女に対して優位にあるようなものであった。彼女は口元にうっすらと笑みを浮かべていた。
「顔を上げて下さい」
エリザベッタは一同に対して言った。皆それに従い顔を上げる。
「お楽しみのようですね」
彼女は公女と女官達に微笑んで言った。
「はい、歌を歌っておりました」
公女が一同を代表して答えた。

「まあ、どのような歌ですか？」
「スペインの歌です。ヴェールの魔力を歌ったものですよ」
「ああ、あの歌ですね」
ヴェールの歌のことは彼女もよく知っていた。
「恋の魔力ですね」
「そうです」
公女は謹んで申し上げた。
「素晴らしいですね。殿方の御心を再び虜にするなんて」
「殿下には必要のないものかと存じますが。陛下がおられますので」
「はい」
彼女はおもてむきは優雅に微笑んで答えた。だがその内心は別であった。

## 第二幕その五

（私が欲しいのはそれではないわ。私が欲しいのは・・・・・）
そこでカルロの顔が思い浮かぶ。だがそれは心の中で打ち消した。
（いけない、もう忘れなくては）
すっと目を閉じた。そしてすぐに再び目を開けた。
「どうなされました？」
公女はそれに何かを感じた。そしてエリザベッタに対して問うた。
「いえ、何も」
彼女は平静を装い答えた。だが公女はそこに何かを感じていた。
ロドリーゴがその場にやって来た。
「陛下、これはご機嫌うるわしゅう」
彼はエリザベッタの前に来ると片膝を折った。エリザベッタは彼の前に右手を差し出した。
「有り難き幸せ」
そして手の甲に接吻をすることを許した。それから彼を立たせる。
「陛下にお渡ししたいものがあります」
彼は立ち上がると彼女に対して言った。
「それは何でしょうか？」
「これです」
懐から何か取り出した。それは一通の手紙であった。そこには王冠と百合の紋章がある。彼女の家であるヴァロア家の紋章だ。
「是非お読み下さい」
「はい、わざわざ有り難うございます」
エリザベッタは礼を言うとその手紙の封を切った。そして手紙を読みはじめた。
「そういえばフランスでは今何が行なわれているのですか？」
公女がロドリーゴに対して問うた。
「今は宮廷で開かれる槍試合のことで話題がもちきりらしいですよ」

ロドリーゴは親切な物腰で答えた。
「まあ、あの国らしいですね」
公女はそれを聞いて微笑んで答えた。当時のフランスは文化的にはまだ進んでいるとは言えなかった。実際はブルボン朝の時代になっても王が決闘で人を殺すこともあったし衛生観念なども無かった。ベルサイユ宮殿の庭やカーテンの隅は汚物で満ちていた。この時代は言うまでもない。食事は手掴みであったし服装も洗練されているとは言い難かった。むしろイタリアの諸都市の方が余程洗練されていた。
「何でも陛下も出場されるそうですね。今はそれが話題の的となっておりますよ」
「陛下ご自身がですか！？」
「はい」
なおこの王はエリザベッタの父である。フランス王アンリ二世。彼はこの試合で命を落とすことになる。
「これは素晴らしいことですわね。フランス王といえば大変な偉丈夫だとか」
「はい。どの者も陛下の見事な槍裁きを見たいと言っているようですよ」
この試合で彼は命を落とす。そして息子が後を継ぎ彼の妻であったカトリーヌ＝ド＝メディチが後見人となる。彼女はイタリアの富豪メディチ家の出身であるが当時においても歴史においても評判は芳しくはない。当時メディチが様々な権謀術数を駆使していたことは広く知られていたし彼女自身も黒ミサを行なっただの政敵を暗殺しようとしただの女官達を使って情報を集めているだの良くない噂で満ちていた。そして後にフランスの新教徒達を虐殺している。歴史に名高い『サン＝バルテルミーの虐殺』である。これは宗教よりも政争であったがこれにより多くのフランスの新教徒、ユグノーが殺された。パリは彼等の血と屍骸に覆われた。そのことから彼女の悪名は今にまで伝わっている。

そうしたフランスであったがここに一人の美女がいた。ディアヌ＝ド＝ポワティエである。彼女はその老け込まない美貌で何と二十歳年下の国王アンリ二世を虜にしてしまっていた。彼は七歳の時に彼女を見て一目で心を奪われそして死ぬまで彼女のことのみを考えていたのだ。それ程までに美しい女性であるから当時でもフランス以外の国においても評判の美女であった。彼女はフランスの宮廷の女性の代名詞とも言える存在であった。

「ところでお話は変わりますけれど」

「はい」

ロドリーゴはエボリの話に合わせた。

「パリのルーブルでの夜会はそれはそれは素晴らしいものだとか」

「はい、あの方もおられますし」

彼はふとそのディアヌ＝ド＝ポワティエの話題を出した。

「あの方は肖像画でしか知らないのですが」

公女はエリザベッタをチラリと見て言った。

「まるで女神のようだとか」

実際に彼女は月の女神とも称えられていた。

「はい、私も一度お会いしたことがありますが」

ロドリーゴは答えた。

「本当にお美しい方ですよ」

「それはそれは私もそのようになれたらいいのですが」

「御心配なく。貴女はあの方よりも美しいですよ」

「まあ、そんなご冗談を」

二人はこうして他愛もない話をしている。エリザベッタはその間に手紙を開いていた。

「これは」

それは父王からの手紙ではなかった。王冠と百合の紋章はダミーであったのだ。

「・・・・・・・・・・」

それはスペインの言葉であった。

『親愛なる貴女へ』
それはカルロからの手紙であった。
「どういうこと・・・・・・」
どうやらロドリーゴは彼にこの手紙を渡してくれるよう頼まれたようだ。
しかし彼は自分とカルロの間にあるこの気持ちを知らないようだ。何故なら今彼女を見向きもしないからだ。どうやら本当にヴァロア家からの手紙だと思っているらしい。如何に心を割った友でも語れはしないことなのだから。
『私は貴女にお伝えしたいことがあります』
だが彼女はその揺れ動く気持ちを抑えた。そして平静を装い手紙を読んでいった。
『ポーザ侯爵ですが』
ロドリーゴのことである。彼等の関係は彼女も知っている。
『いざという時は彼を頼りにして下さい。彼は必ずや私達の助けとなるでしょう』
どうやら彼はいずれ自分達のことを彼に打ち明けるつもりのようだ。
（だけどそれは・・・・・・）
大変危険なことにもなりかねない。彼女はロドリーゴに目をやった。

## 第二幕その六

彼はエボリ公女と話し続けている。美男子である彼は宮中においても人気があるのだ。

『近いうちに私はフランドルへ向かおうと考えています。その時までに一度二人でお会いしましょう』

そこで手紙は終わっていた。彼女は読み終えるとその手紙を服の中に隠した。

「御覧になられましたか？」

公女との話を終えたロドリーゴはエリザベッタに顔を戻した。

「え、ええ」

エリザベッタはその言葉にドキリ、としながらも何とか平静の表情で答えた。

「ところで殿下が言っておられましたが」

「息子が！？」

形式上の息子でしかないが。

「はい、何やらとても思い詰めておられるようです」

彼はフランドルの話の前置きの為にこう行ったのだ。フランドル行きを彼女が支持してくれれば心強い後ろ楯だからだ。

「一体何を」

フランドルのことは彼女はある程度は知っているつもりである。しかし何故彼がフランドルに行こうと考えているのかまではよくわからなかった。

「それは私にもよくわかりません」

彼は半分は知っていた。だがもう半分は知らなかった。その半分こそが重要であるというのに。

「ですがお母上がそれをお救いになれば殿下にとってまたとないお力になると存じます」

彼はカルロがエリザベッタを愛しているということを知らない。

その為にこう言ったのだ。彼は彼女がフランドルについて支持して欲しかっただけだったのだ。
「私が・・・・・・」
彼女は真摯な表情を作って答えた。
「はい、陛下のお力添えが欲しいのです」
それは横から聞いている者がいた。
「殿下がお悩み？」
それはエボリ公女であった。
「そういえば殿下は」
彼女は考えはじめた。
「私が王妃のお側にいた時私に見られて震えておられたわ」
実は彼女はカルロを憎からず思っていた。勝気な彼女は繊細な彼をまるで弟の様に思っていたのだ。
「それならそうと早く仰ればいいのに」
彼女はそう思って内心で微笑んだ。
「私ならば何時でも殿下を受け止められるのだし」
彼女はカルロの気持ちを誤解してそう思った。その間にもエリザベッタとロドリーゴの話は続いていた。
「殿下は今孤独な立場におられます」
ロドリーゴはさらに言った。彼はカルロとフランドルをこの時無意識のうちにか重ね合わせていた。
「陛下はとてもお忙しい方で殿下と父子の間柄の関係には少し遠いものになっています。そして殿下は今ご自身を愛して下さる方を求めておられます」
（それはわかっています・・・・・・）
彼女は内心哀しい声で言った。
「あの」
そこで女官の一人を呼んだ。
「はい」
すぐにそのうちの一人がやって来た。

「我が子に伝えて下さい。今はこの僧院の中にいるのですね」
「はい」
「すぐにここに来るようにと」
「わかりました」
そして彼女は僧院に入っていった。やがてカルロが出て来た。
彼はエリザベッタの顔を見て青くなっている。それを見た公女は密かに思った。
(早く私にその気落ちを仰って下さればいいのに)
「あの」
そこでエリザベッタが皆に対し言った。
「これで何処かでお茶でも」
彼女は金貨を女官達の一人に手渡した。人払いである。
「わかりました」
皆頭を垂れその場をあとにした。こうして僧院の前にはカルロとエリザベッタだけとなった。
カルロはゆっくりとエリザベッタに歩み寄る。そして目を伏せて跪いて一礼した。
「お立ちなさい」
エリザベッタはそんな彼を立たせた。
「お話とは何ですか?」
彼は表面上は何とか平静を取り繕いながら尋ねた。
「母上にお願いがあって参りました」
カルロも息子として彼女に答えた。
「一体何をお願いに来たのですか?」
彼女はわかっていながらも再び尋ねた。それはいささか儀礼めいたものであった。
「私はフランドルに行きたいのです。どうもこのスペインの空気が合わないものでして」
「奇妙なことを仰いますね」
彼女はあえて冷たい声で言った。

「貴方はこのスペインの後継者だというのに」
「それは・・・・・・」
カルロはその言葉に対し息を詰まらせた。
「答えなさい、我が子よ」
彼女はこの時はまだ己を保とうとしていた。そして彼を自分の子と呼んだのだ。しかしそれが逆効果になってしまった。
「その名で呼ぶのは・・・・・・」
「それでは何とお呼びすればよろしいのでしょう？」
「・・・・・・・・」
カルロは答えられなかった。重苦しい空気がその場を支配した。
「フランドルの件は私が陛下にお話しておきます。それではこれで」
彼女はそう言うとその場を去ろうとする。
「お待ち下さい！」
だがカルロはそれを急いで引き留めた。
「どうしたのです、まだ何か言う事があるのですか？」
「貴女は私に言うべき言葉がある筈です！」
カルロはエリザベッタの手を掴んで言った。
「何をですか！？」
彼女は今自分の心が大きく傾いたのを悟った。だがそれに対し必死にあがらった。
「離しなさい」
彼女は自分の手を掴むカルロに対して言った。
「はい・・・・・・」
カルロはその手を離した。
「唯一日とはいえ永遠に愛し合おうと誓ったというのに。貴女は何故私を避けられるのですか」
「それは・・・・・・」
今度はエリザベッタが言葉を詰まらせた。そして顔を俯ける。
「私が愛していたのは大理石の像なのですか！？心なぞ一切持たない。貴女は私に対して愛情など全く持ってはいなかったのですか！

？」

「そんなわけでは・・・・・・」

彼女は自分の心の中にある本当の気持ちはよく知っていた。そして今それが大きく息を吹き返そうとしていることもわかっていた。

## 第二幕その七

「私は愚かだった。その様な冷たい心の持ち主を愛していたとは。しかしこれで決心がついた」
「何をです！？」
エリザベッタはその声に顔を上げた。
「私は今すぐにフランドルに行きましょう」
そう言ってその場を去ろうとする。
「待って下さい、カルロ！」
エリザベッタはここでようやく彼の名を呼んだ。そして必死に呼び止めた。
「私の気持ちもわかって下さい。私は今言うことが出来ないのです」
「何故ですか！？」
「私は今貴方を一人の女として愛することが出来ないのですから・・・・・けれど」
エリザベッタは振り絞るようにして言った。
「この私の沈黙の中にある言葉・・・・・それを読み取って下さい」
彼女はカルロの背に抱き付いてそう言った。
「しかしそれは・・・・・」
カルロの想いは今でも変わりはない。だからこそ、エリザベッタの気持ちがたまらなかったのだ。
「お願いです、それだけはわかって下さい」
「・・・・・・・・」
カルロは沈黙した。そしてエリザベッタの方へ振り向こうとする。だが出来なかった。何か、心の奥底にあるその何かが彼を動かさなかったのだ。
「そして貴方も心に留めておいて下さい。今は想ってもどうも出来ないものなのですから」

「そんな・・・・・・」
カルロにはそれが堪えられなかったのである。その中に燃える炎は誰にも消せるものではなかった。だからこそ彼はロドリーゴの言葉に従いそれをフランドルに向けようとしているのだ。
「いや、神はこう言われています。真実に従う者に誤りはない、と」
そして奥底にあるそれを振り切りエリザベッタに顔を向けた。
「私の気持ちは変わらない、貴女にだけ！」
そしてエリザベッタを抱き締めようとする。
「嫌っ！」
しかし彼女はその手を振り解いた。彼を愛する気持ちより王妃としても責任感が彼女をそうさせたのだ。
「やはり貴女は・・・・・・」
カルロはそれを見て絶望した顔になった。
「違います・・・・・・」
エリザベッタはそれを否定した。
「だけどわかって下さい、カルロ。私はもう貴方を」
「・・・・・・もういい」
カルロは絶望しきった顔でエリザベッタに背を向けた。
「これが私の忌まわしい運命なのだから」
そう言うとその場から姿を消した。
「何故こんなことに・・・・・・」
悲嘆したエリザベッタはその場に崩れ落ちた。そしてそこに大勢の者が来る気配がした。
「あれは・・・・・・」
見れば国王である。先程下がらせた女官や小姓、そしてロドリーゴもいる。
「む、あそこにいるのは我が妃ではないか」
その中心にいる一際威厳のある男がエリザベッタの姿を認めて言った。
細長い顔に高い鼻を持っている。唇は厚く下顎が出ている。背は

高く姿勢はしかkりとしている。その風貌はカルロのそれと酷似している。服は質素であるがその威厳は周囲を圧していた。
この人物こそスペイン王フェリペ二世である。ハプスブルグ家出身でこの国のみならず中南米、そして多くの領土を支配する。欧州第一の勢力を治める者である。
カール五世の嫡子として生まれた。質実剛健で謹厳実直な人柄で知られている。父であるカール五世が庶民性を持ち民にまで深く愛されたのに対し彼は民から深く信頼されていた。
『国王は国家の第一の僕である』
彼の口癖であったが彼はその言葉通りに動いた。国政のあらゆることに耳を傾け目を向けた。贅沢を嫌いその宮殿も雄大ではあったが装飾は少なかった。
『贅沢は君主の敵である』
彼はそう考えていた。ハプスブルグ家は代々質素な生活を好んでいたが彼はそれを一際重んじた。そして宗教的な情熱も深かった。
よく彼は狂信的な旧教の支持者と言われた。だが熱心な信者であることは確かだが分別は持っていた。かって妻であったイングランドの女王メアリー一世の極端な弾圧をやり過ぎだと批判もしている。
しかし彼はハプスブルグ家の者である。やはり旧教は擁護しなければならない。彼はそのこともよくわかっていた。その為にフランドルでは血が流れていたのだ。
そしてあまりにも生真面目であった。それが彼をいささか孤独なものにしているのは否定出来なかった。彼は何よりも規律を重んじていたのだ。
「何故一人でいるのか」
彼がまず問うたのはそれであった。
「我が宮廷においては王妃の側には常に誰かが控えていなければならないが」
「それは・・・・・・」
皆口篭もった。王妃にその場を離れるよう言われたことなど言う

に言えないからである。

## 第二幕その八

「答えるのだ。今日のお付の女官は誰だ？」
「私です」
一人の女官が進み出た。
「ふむ、そなたか」
国王は彼女を一瞥した。
「宮廷の法は知っていような」
「はい」
彼女は頭を垂れて頷いた。
「暇を与える。故郷に帰るがいい」
「わかりました」
彼女は泣きながらその場を去ろうとする。
「お待ち下さい、陛下」
そこにロドリーゴが進み出た。
「どうした、侯爵」
国王は彼に顔を向けた。
「あの女官は王妃様の親しい友人です。ここは大目に見て差し上げるべきかと」
「法は法だ。曲げるわけにはいかん」
彼は毅然として言った。その言葉には誰も逆らえそうになかった。
「それですが」
だがロドリーゴはそれにも臆することなく言った。
「今法は伝えられました。ですが恩赦もあるのではないでしょうか」
「ふむ」
国王はその言葉を聞くと顎に手を当てて考え込んだ。
「皆はどう思うか」
そして周りの者に対し問うた。
「侯爵の仰るとおりだと思います」

皆そう答えた。
「そうか。ならばここは許すとしよう」
彼は落ち着いた声でそう言った。
「これ」
そして立ち去ろうとしていた女官を呼び止めた。
「そなたの暇を取り消す。だが暫くの間謹慎しているがいい」
「わかりました」
そして女官はその場を去った。
「妃よ」
そしてエリザベッタに顔を向けた。
「これでよいな」
「はい」
エリザベッタは静かに頭を垂れた。
「陛下の深い御心、感謝致します」
「礼はよい、わしは法を忠実に施行したまで、そして周りの者の言葉を聞き入れただけだ」
彼は喜ぶこともなくそう言った。
「ところで王太子の姿が見えぬが」
彼はカルロの姿が見えないことに気がついた。
「既に宮廷に帰られたようです」
ロドリーゴが答えた。
「そうか。僧院への参拝は済ませたのだろうな」
「はい、それはもう」
「ならば良い。しかし共の者も連れず一人で去るとは感心さぬな。後で言って聞かせるとしよう」
「御意に」
彼はエリザベッタに顔を戻した。
「妃よ、そなたも宮廷に戻るがいい。そして明日に備えゆっくりと休むのだ」
「わかりました」

エリザベッタは再び頭を垂れそれを了承する。そして女官達と共にその場を後にする。
ロドリーゴもそれに従おうとする。だがそれを国王が制した。
「待て、わしはもう少しこの場に用がある。護衛をせよ」
「わかりました」
ロドリーゴはその言葉に従った。
「さて、侯爵よ」
国王は彼を見て言った。
「近頃宮廷にあまり姿を現わさないのはどういうことか？」
「体調が優れませんので」
彼は国王の問いにそう言って誤魔化した。
「見たところそうは思えんが」
国王はそんな彼の顔を見ながら言った。
「心の方でして」
「ほう、心か」
国王はその言葉に眉を動かした。
「それならば気晴らしに宴でも行ってはどうか。わしは宴はあまり好まんが」
「それは私もです」
「だが時には酒も必要だ。人間はパンと水のみによって生きているのではない」
「それは存じております」
「フム、そなたは堅いな。だがそれがいい」
国王はそんなロドリーゴを見て微笑んだ。
「わしはそなたのその心持ちが好きなのだ。気位の高さもな」
「有り難うございます」
「ところで軍務を離れたのだったな」
「はい」
「それは良くないな。そなたの才はこのスペインにとって欠かせぬものなのだ」

「有り難きお言葉。私は陛下が、そしてスペインが必要とされる時に再び剣を取りましょう」
「今はその時ではないというのか」
「お言葉ながら」
「ふむ」
国王はその様子に彼の本心を探ろうとした。
「何かあったようだな」
そして彼の顔を見ながら言った。
「この前フランドルに行っていたが」
それを聞いたロドリーゴの顔色が変わった。
「あれは軍務であったがな」
「はい」
「その時に何かあったのか」
「いえ・・・・・・」
ロドリーゴは顔を俯けてそれを否定した。
「まあ良い、それは聞かないでおこう。戦場では色々とあるからな」
「有り難うございます」
彼はこうした心遣いも出来る。血脈のみで王をしているわけではなかった。
「ですが私は今心の中にあるものを申し上げたいと思います」
「そうか」
これは国王にとって意外であった。彼は聞かないつもりであったがその心遣いにロドリーゴの方が感じ入ってしまったのだ。
「今フランドルは血にまみれております」
「・・・・・・・・・」
国王は沈黙した。黙して聞いていた。
「あの美しかったフランドルが今や焼け野原になり戦火に焼かれております。川は血で赤く染まり親を亡くした子供の泣き声が木霊しております」
「・・・・・・そうか」

ロドリーゴは話を続けた。
「人骨が石の様に転がり食べるものもなく餓えた者達が死を待つばかりです。陛下、今フランドルは地獄なのです」
「それは全てあの新教徒共のせいだ」
彼は顔を顰めて言った。
「あの者達は我がスペインに対して反旗を翻した。それは許されるものではない」
「ですが陛下」
「侯爵よ、あの者達の実態は知っているか」
「いえ」
ロドリーゴは王の言葉の前に畏まった。
「あの者達は確かカルヴァンというフランスからスイスに移った男の教えを守っているのだな」
「はい」
「わしはあの男を知っている。極めて厳格て潔癖な男だ」
「はい」
「だがあのルターと同じ教えではないか。どうしてあのようにいがみ合うのだ？」
実ルター派とカルヴァン派の対立は深刻であった。彼等は旧教に対するよりも更に激しくお互いを憎しみ合っていたのだ。

## 第二幕その九

「我等とて多くの問題がある。ハプスブルグとヴァロワは信じる神は同じだが不倶戴天の敵同士だ」

これは長くから、そう彼の曽祖父マクシミリアン一世の頃より変わらない。彼の父カール五世はイスラムのオスマン＝トルコだけでなくフランスともイタリアやフランドルを巡って激しく対立していた。

「あの好色な男の時より前からフランスはイタリアを狙っていたのだ」

フランス王フランソワ一世のことである。彼はイタリアに攻め込んでいる。カール五世もそれに対抗した。しかも時のローマ教皇は反ハプスブルグ派であった。しかもそこに新教徒まで入っていた。イタリアは大混乱に陥っていた。

このフランソワ一世も時の教皇クレメンス七世も狸であった。彼等は激しくカール五世と対立した。そして遂にローマで衝突が起こった。『サッコ＝ディ＝ローマ』である。古の都ローマは灰燼に帰した。

「あの時までバチカンは我等に何かと嫌がらせをしてくれた。しかしあの男が出ると態度は一変した」

その男こそマルティン＝ルターである。

「バチカンは信仰で動いているのではない。政治、そして自らの権勢の為にのみ動くのだ。言っておくが神を信ずる教皇などこの世にはおらんぞ」

そのことは彼が最もよく知っていた。

「だが我々はそのバチカンを護らずにはおれぬのだ」

神聖ローマ帝国、その王冠はローマ教皇より授けられる。神聖ローマ帝国皇帝、すなわちハプスブルグ家とは教会を護ることがその責務であるのだ。それを否定することは出来ない。カール五世もバ

チカンには手を焼いていた。彼はエラスムスに共感するところが多かった。しかしそれでもバチカンの守護者であったのだ。
「それがわからぬ卿ではあるまい」
「はい・・・・・・・」
それはロドリーゴにもわかっていた。だがそれでもフランドルのことを思うと言わずにはおれなかったのだ。
「ですが陛下、フランドルの民は」
「言うな」
王は首を横に振った。
「言っただろう、ハプスブルグ家はバチカンの守護者なのだと」
「は・・・・・・」
ロドリーゴはその言葉に対し片膝を折った。
「世界には神以外にはどうすることも出来ないことが多々あるのだ。わしはこのスペインの王だ。だがわしも人間に過ぎない。わしはこの領地の下僕なのだ。わしが出来ることはこの領地とそこにいる民達の中の最も多くの者の幸福を守ることなのだ。だがそれでも果たせぬことがある。いや、果たせぬことばかりだ。わしは皆が思っている程無限の力を持っているわけではない」
「・・・・・・・・・・」
今度はロドリーゴが沈黙した。それは彼もよくわかっていたのだ。だがそれを理解出来ない者が殆どなのだ。人の力など知れているということが。
「特に教会はな。ドイツ程ではないがここにもバチカンの目が光っている」
異端審問官だ。バチカンが作り出した最も忌まわしいものであろう。魔女狩り、欧州をそのドス黒い炎で覆った邪悪な悪行だ。
これもまた旧教と新教の対立の中で激化していった。皆悪魔を恐れていた。悪魔は魂を奪い地獄に導くと。だが彼等は気付いてはいなかった。人の心に地獄があり悪魔もまた人の心に棲むのだと。
欧州の空は魔女と断定された哀れな女達を焼く炎と煙で赤と黒に

染められた。青い空はその中に消えていった。自白、密告、陰謀、嫉妬、憎悪・・・・・・。人々の心から神は消え悪魔が棲んだ。否、それは悪魔であったのだろうか。悪魔とは何ぞや、と言われると神の反逆者である。元々は異教の神であったり天使であったのだ。失楽園等に見られる彼等は悪であろうか。彼等もまた正義なのではなかろうか。正義とは一つではないのだ。

人の心には光も闇もある。ここに出て来たのは闇であった。それは悪魔よりも邪悪なものであった。

血生臭い拷問に処刑・・・・・・。そこには人の光はなかった。ただ闇があった。その中で多くの者達が苦悶のうちにその命をすり潰されていった。まるで物のように。ドイツでもスペインでもイングランドでも。このスペインでも王の言葉通りドイツ程ではないが彼等がいたのだ。

「あの者達の後ろにはバチカンがいる。わしとてそうそう手出しができるものではない」

「はい・・・・・・」

「侯爵よ、立つがいい。卿に跪くのは似合わぬ」

「勿体無き御言葉」

彼は王に促され立ち上がった。

「卿は怖れぬな。だが怖れを知っている」

意味深い言葉であった。

「だがそんな卿だからこそわしは気に入ったのだ」

彼は言葉を続ける。

「わしの家族を見てどう思う」

「それは・・・・・・」

これにはさしものロドリーゴも言葉を詰まらせた。

「わしはあまり家族の愛を知らぬ」

彼は幼い頃に母と死に別れている。そして一度目の結婚は妃に先立たれ二度目の結婚はあのメアリー一世であった。狂信的な旧教徒である彼女を彼はどうしても愛せなかった。そして彼女は子供が産

めなかった。やがて彼はスペインに戻った。それから程なくして彼女もこの世を去った。
「今はエリザベッタがいるが」
「大変聡明でお美しいお方ではないですか」
「だが幸福とはそれで訪れるものなのか？」
「それは・・・・・・」
やはり彼は答えられなかった。幸福なぞというものは自分以外の誰にもわかりようがないものなのだから。
「わしは気になって仕方がないのだ」
王の顔は暗さを増していく。
「何がでしょうか？」
ロドリーゴはようやく尋ねることが出来た。
「妃と息子のことだ」
「殿下が！？」
「そうだ。まさかとは思うが」
王の顔は一言一言ごとに暗さを増していく。
「取り越し苦労であれば良いが。だが疑惑は晴れぬのだ。いや、一刻ごとに増していく」
「それは杞憂です」
「そうとも言い切れぬ。少なくともわしにとってはな」
「・・・・・・・・」
最早その顔は闇の中に消え入りそうであった。
「卿に頼みがあるのだ」
「はい」
王はここでその顔の闇を何とか消そうとした。そして完全ではないが幾分かは消した。
「あの二人をよく監視してくれ。間違いがないようにな」
「わかりました」
ロドリーゴはそれを聞いてカルロが何故あのように思い詰めているか理解した。

「わしは卿を信じる。それに応えてくれよ」
「御意に」
ロドリーゴは頭を垂れた。
「頼んだぞ、全ては卿にかかっている」
「はい・・・・・・」
ロドリーゴは顔を上げた。そして意を決した。
(陛下と殿下、そしてフランドルをお救いするには)
彼はカルロがいる宮殿に顔を向けた。
(やはりあれしかない)
その瞳に強い思いが宿った。
「侯爵」
そこで王が彼を呼んだ。
「はい」
彼はその声に応え再び顔を向けた。
「期待しているぞ」
「わかりました。必ずや陛下のご期待に添えます」
王は右手を差し出した。ロドリーゴはその前に跪きそれに接吻をした。
そして二人はその場を後にした。後には何も残ってはいなかった。

# 第三幕その一

## 第三幕　宮殿と大聖堂

フェリペ二世はマドリードを首都と定めていた。平凡な一地方都市であったこの街を首都としたのはこの街がスペインの中央に位置していたからであった。彼はそこからスペイン全体に道を拡げ隅々まで見渡そうと考えたのである。

その彼が築いたのがエスコリアル宮殿である。雄大なバロック様式の宮殿であり壮麗ではあるが装飾は少ない。それは彼の趣向をよく現わしていた。

中には農園や果樹園もある。これは修道僧達によって経営されていた。図書館や礼拝堂もあった。王宮であると共にカトリックの厳格な修道院でもあったのだ。

十六世紀にイエズス会が創設されている。彼等は厳格にして禁欲的な教義を信仰する旧教徒達であった。バチカンに絶対の忠誠を誓いその教義を護ることを誓い腐敗を憎悪した。彼等は旧教を世界各地で布教していたが日本にもやって来ている。フランシスコ＝ザビエルである。彼等の指導者であるイグナティウス＝ロヨラはここを拠点としていた。

この宮殿で今宴の用意が為されている。何やら国王の戴冠式のようだ。

彼はスペイン王であるが他にも多くの役職を持っていた。ポルトガル王を兼ねていた時もある。彼の地上での役職は実に多いものであったのだ。

ここは庭園である。緑の草の絨毯が敷かれ左右には色とりどりの花々が咲いている。奥にはアーケードが見える。そしてその下に彫像と泉がある。天井はなく夜空が見える。雲一つなく星と月が見える澄んだ夜空であった。

「さあさあ急いで」

女官達がその中をせわしなく動いている。
「宴は待ってはくれませんよ」
「そうそう、夜が明ける時は決まっているのです」
エリザベッタはその中に優雅に姿を現わした。彼女は女官達を従えそれを見守っている。
「皆の者、頑張って下さいね」
彼女は女官達に対して優しい声をかけた。
「陛下は今は主に対し感謝しておられます。この度の戴冠に際して」
「王妃様も行かれるのですね」
「はい、これから」
王妃はそれに対して答えた。そこにエボリ公女が姿を現わした。
「王妃様、よろしいのですか？」
彼女は王妃に対して言った。
「何がですか？」
王妃は答えた。
「宮廷のこともありますし。それに殿下も心配なされますよ」
その名を聞いた時彼女は一瞬顔色を変えた。だがすぐに元に戻した。
「私も行かなくてはならないでしょう。王妃なのですから」
「そうですか。それではお気をつけて」
「有り難う」
こうしてエリザベッタはその場を後にした。女官達もそれに続く。
「さてと」
公女は彼女が去ったのを見届けると一人に暇そうな女官を見つけた。
「ちょっと」
そして彼女に対し声をかけた。
「何でしょうか？」
「少し頼みごとをしたのだけれど」
そう言って金貨を数枚手渡した。

「この手紙を殿下に」
そう言って懐から取り出した一枚の手紙を彼女に手渡した。
「わかりました」
彼女はそう言うとその場を後にした。
「これでよし」
公女はそれを見届けると満足気に笑った。
「これで殿下は私のものに」
彼女は夜空を見上げながら呟いた。
「あの繊細な殿下の御心は私のものに。暗闇の優しいヴェールに殿下をお包みして恋に酔わせて差し上げるとしましょう」
そう言うとその場を後にした。そして皆準備を終えその場を後にした。
その庭園の外れである。もう誰もいない。公女はそこに一人で隠れるようにしてやって来た。
「誰もいないわね」
辺りを見回す。確かに誰もいない。
その場にやって来た。そして遠くから誰かが来るのを見た。
「あれは」
陰に身を隠した。覗き見るとどうやら若い男のようだ。
「来たわね」
彼女は微笑むとその場にそっと現われた。わざと闇の中に影だけ見えるようにして。
「月桂樹の下にある泉のほとりか」
彼は庭園の中を見回しながら呟いている。
「ここだな」
来たのはカルロである。彼は不安げな様子で辺りを見回している。
「まさか彼女の方から私を呼んでくれるとは」
嬉しそうである。だがそれ以上に不安なようだ。
「この前まであれ程頑なだったというのに」
「まあ、殿下も私のことを」

彼女はそこで仮面を取り出した。
「恋は時にはこうした道具も使うもの」
そしてそれで顔を隠した。そこでカルロが声をかけてきた。
「愛しい人よ、そこにおられたのですね」
彼女の後ろ姿を認めて喜びの声をあげた。
「よくぞ呼んで下さいました」
「そんな、思ったより積極的なのね」
公女はカルロの言葉に頬を赤らめさせた。
「まさか貴女の方から手紙をよこして下さるとは」
「殿下ったら・・・・・・。それなら早く仰って下さればいいのに」
彼女は胸に手を当てて顔を少し斜め下に向けて言った。
「奥手なのかしら。それにしては情熱的だこと」
「これで私も本当の気持ちが言えます」
「えっ、いきなりそんな・・・・・・」
公女はもう信じられなかった。胸の鼓動が身体全体から聴こえるようであった。

## 第三幕その二

「もう過去も現在も未来もありません。私の全てを貴女に捧げましょう！」
「それは本当ですか！？」
彼女はもう我慢が出来なかった。身体をこちらに向けた。
「は、はい」
カルロはここで妙なことに気付いた。王妃の背が普段より低いように見えたのである。そして声も低いような気がした。しかし気のせいだと思った。
「殿下、私も貴方のことを思い焦がれておりました」
「その言葉、お待ちしておりました！」
「それではこんなものもう必要ありませんね」
公女はそう言うと仮面を取り外した。
「！」
それを見たカルロは表情を凍らせた。
「殿下、お慕いもうしております！」
そう言ってカルロを抱き締めようとする。だが彼はそれから身をかわした。
「ど、どういうことなのだ、これは！？」
カルロは顔を蒼ざめさせていた。
「・・・・・どうしたのですか！？」
皇女はそんなカルロの顔を見て不思議に思った。
「つい先程まであんなに嬉しそうでしたのに」
「それは・・・・・」
見ればエボリ公女である。カルロはそのことに益々顔を青くさせた。
「こんなに強張ってしまって・・・・・。折角お互いの気持ちを確かめることができたというのに」

「いや・・・・・・」
「違いますの！？」
公女はカルロの顔を見上げて問うた。
「殿下、私は知っているのです」
「何をですか！？」
カルロは顔を近付ける公女に対して問うた。
「貴方が今どういう立場におられるかを」
「立場といいますと」
カルロはその言葉にギョッとした。
（エリザベッタのことかも・・・・・・）
そう思うと恐怖した。今彼女の名を呼ばなくて本当に良かったと思った。
「お父上とポーザ侯爵が貴方について色々とお話しております。貴方は今大変危険な状況にあるのです」
（ロドリーゴが・・・・・・そんな・・・・・・）
カルロは親友と思っていた男の思いもよらぬ行動を知り愕然となった。
「ですが御安心下さい、殿下には私がいますわ」
「貴女が・・・・・・」
「はい、先程も言いましたがお慕いもうしております、一生殿下を愛しますわ」
「有り難う」
カルロは彼女に対しとりあえずは礼を言った。
「貴女の気持ちはよくわかった。しかし」
「しかし・・・・・・」
その言葉を聞いて公女は表情を変えた。いぶかしむものとなった。
「私は貴女の気持ちに応えることは出来ないのです」
「どういうことですか！？」
「それは聞かないで下さい」
「・・・・・・・・・」

公女はその言葉に顔色を暗くさせた。そしてあることに気がついた。
「殿下、まさか・・・・・・」
「・・・・・・・・・」
カルロは公女の言葉に顔を蒼白にした。
「答えて下さらないのですね」
「それは・・・・・・」
答えられなかった。もし答えたなら全てが終わるからだ。
「いえ、もうわかりました」
だが答えなくとも結果は同じであった。
「そのようなことが許されると思っているのですか！？」
「言わないでくれ」
「いえ、言わずにはおれません！」
公女は声をあらいものにした。
「それが一体そういうことかわかっておられるのでしょうか！」
「わかっていてもどうにもならないことがあるんだ！」
彼は激昂してそう言った。
「開き直りましたね」
公女はカルロの顔を見上げて言った。
「この期に及んで」
「それは・・・・・・」
彼は自分が底なし沼にはまったことを悟った。そこへ誰かがやって来た。
「誰だ、そこで騒いでいるのは」
見ればロドリーゴである。
「殿下、どう為されたのですか！？」
彼はカルロに近付いて来た。
「エボリ公女も。一体どうしたというのです！？」
「殿下の秘密を知りましたの」
公女は悪魔めいた笑みを浮かべて彼に対して言った。

「殿下の！？」
彼は最初フランドルのことかと思った。
（いや、違うな）
だが彼はそうではないとすぐに察した。
（まさか・・・・・）
ここでは彼は王が彼に対し語ったことを思い出した。
「では私はこれで」
公女はそう言うとその場を立ち去ろうとする。
「お待ち下さい」
彼はそんな彼女を呼び止めた。
「何処へ行かれるのです？」
「急用が出来まして」
彼女は素っ気無く答えた。その時チラリ、とカルロを見た。
（やはりな）
彼はその目の動きを見て全てを悟った。そし彼女に対して言った。
「貴女を行かせるわけにはいきません」
「何故ですか！？」
「貴女は今邪なことを考えておられるからです」
「あら、それはどうでしょう」
公女はロドリーゴに対し不敵な笑みで返した。
「むしろ貴方の方が邪なことを知っているのではなくて！？」
「何！？」
ロドリーゴはその挑発的な言葉に対し顔を顰めた。
「貴方が殿下のご親友であることはご存知ですわ。けれど私は殿下も貴方も地獄へ送って差し上げることが出来るということはご存知ないようですね」
「それは一体どういう意味だ！？」
「私も力を持っているということです」
彼女と彼女の兄の宮廷での力は良く知っている。だがこの口調からはそれ以上のものを感じるのだ。

「殿下と私をか」
ロドリーゴは彼女を睨み付けた。
「面白い、私はともかく殿下には指一本触れさせぬぞ」
彼はカルロを庇うようにして言った。
「あら、強気ですわね」
公女はそんな彼を嘲笑して言った。
「私が怒ればどういうことになるか一切ご存知ないというのに」
「戯れ言を。もし言ってみろ」
彼は語気を強めた。

## 第三幕その三

「自分が何故ここにいたかわかってしまうぞ」
「どういう意味ですの！？」
「貴様が殿下を誘惑しようとしていたということは容易に想像がつくということだ」
「フフフ」
公女はその言葉を鼻であしらった。
「それは貴方もそうではなくて！？」
「何！？」
「貴方が殿下をフランドルへお送りしようとしていることも知っていますのよ」
「クッ・・・・・・」
ロドリーゴはその言葉に一瞬怯んだ。だがすぐに態勢を取り戻した。
「私は殿下を王として正しき道に御導きしているだけだ。貴様の様に卑しい道へ誘おうとしているわけではない」
「卑しい道ですって！？」
公女はその言葉に対し眉を吊り上げた。
「そうだ、貴様のその心と同じくな」
彼は気付かなかったが言葉が過ぎた。それが取り返しのつかないことになろうとは神ならぬ彼はこの時気付いていなかったのだ。
「今の言葉、よく覚えてなさい」
彼女は怒りに満ちた眼差しで彼を睨んだ。
「牝獅子の心臓を傷つけたこと、必ず後悔させてやるわ」
「フン、何が牝獅子だ」
ロドリーゴはその言葉を蹴り飛ばした。
「貴様は狐に過ぎん。狡賢い女狐だ」
「女狐ですって！？」

彼女はその言葉に顔を紅潮させた。闇夜の中でもそれがはっきりとわかった。
「その言葉、許せませんわ！」
「許す！？私をか！？」
ロドリーゴはそれに対し睨み返した。
「私は貴様などに許しを乞ういわれはないがな」
「フン、それはどうでしょうね」
だが公女も負けてはいない。
「いずれ貴方と殿下は私の前に跪くでしょうね」
「まだ殿下に危害を及ぼすつもりか！」
彼の怒りは頂点に達した。腰の剣を抜いた。
「あら、どうするつもりですの！？」
「そこになおれ、成敗してくれる！」
彼は公女に剣を突き付けて叫んだ。
「ロドリーゴ、止めろ！」
そこにカルロが割って入った。
「殿下、止めないで下さい、この女は殿下に危害を加えようとしているのですぞ！」
「だが相手は女性だぞ！」
「そのようなことは関係ありません、殿下を御守りする為です！」
「あら、麗しい忠誠心ですこと」
公女そんな彼をせせら笑ってそう言った。
「クッ、減らず口を！」
「ロドリーゴ、落ち着け！」
だがそんな彼をカルロが制止した。その言葉にロドリーゴも次第に落ち着きを取り戻してきた。
「はい・・・・・・」
彼は剣を収めた。そして公女を睨んだまま言った。
「その命、今は預けておこう。殿下に免じてな」
「有り難き幸せ」

彼女は悪びれもせずに昂然と顔を上げてそう言った。
「殿下」
そしてカルロに対して顔を向けた。
「お気の毒に。もうすぐ貴方は奈落の底に落ちますわよ」
「・・・・・・・・・」
カルロはそれに対して顔を青くさせたままであった。
「言ってみろ」
ロドリーゴはそんな彼を庇い公女を睨んだまま怒気を含んだ声で言った。
「そうすれば貴様は神の裁きを受けるだろう。そして一生後悔することになるだろう」
この言葉も奇しくも的中する、だが公女もロドリーゴもそれはこの時は知らなかった。
「それはどうかしら」
彼女はロドリーゴのその言葉を鼻で笑った。この時は。
「精々今はその忠誠心を誇りにしてらっしゃい」
そして激しい炎を口から吐き出した。
「今のうちだけね」
そしてその場を立ち去った。あとにはカルロとロドリーゴが残った。
「殿下」
ロドリーゴはカルロに歩み寄った。
「何か大事なものをお持ちでしたら私に預けて下さいませんか？」
「君にか！？」
「はい」
「しかし君は父上の腹心なのだろう」
「私を疑うのですか！？」
彼はそれを聞いて哀しい顔をした。
「いや」
カルロは首を横に振ってそれを否定した。

「君の心は今見せてもらった」
彼は先程のロドリーゴの行動を見て言った。
「君は私の本当の意味での友人だ。今の君の行動を見てそれがわかった」
「殿下・・・・・・」
ロドリーゴはその言葉に深い感銘を受けた。
「僕は何があろうと君を信じる。だから君のこれを授けよう」
そう言うと懐からあるものを出した。それは一枚の書類であった。
「有り難うございます」
ロドリーゴはそれを受け取ると感謝の言葉を述べた。
「殿下の御心、確かに受け取りました」
「頼んだよ、僕は全てを君に預けた」
「はい！」
二人は強く抱き締め合った。それは友情の熱い抱擁であった。

## 第三幕その四

マドリード北西約二〇〇キロのところにバリャドリードという名の都市がある。カスティージャ＝イ＝レオン州の州都であるがこの街は歴史に度々現われる。

まずカスティーリャとアラゴン両王国の王同士の婚姻が結ばれた場所となった。この婚姻はスペインを作った歴史的な結婚であった。今フェリペ二世がこのスペインを治めているのもこれがあってのことであった。

またこの街には『ドン＝キホーテ』の作者セルバンテスも住んでいた。後にはフランスブルボン王朝の太陽王ルイ十四世の母ドニャ＝アナもこの地で生まれている。ジェノバの船乗りでありアメリカ大陸を発見したコロンブスはこの地で自らが見つけたその地をインドと信じながらこの世を去っている。

その街にある大聖堂である。かって二人の王が結婚したこの地の大聖堂で今とある宴が開かれようとしている。

それはこの時の欧州で度々、いやよく行なわれていた宴であった。異端審問、そしてそれによる処刑である。異端は火刑に処されるのが決まりであった。

見れば聖堂の前の広場に柱が並べ立てられている。木のその柱の下には薪が既に設けられている。

「早くやれ！」

「そうだ、異端に死を！」

民衆の声が響く。娯楽のない時代である。彼等にとってこの処刑はまたとないショーであった。

こうした公開処刑は長い間人々にとってショーであった。ローマではコロセウムにおいてキリスト教徒達が餓えた獣に貪り喰われる様を見ることがショーであった。あちこちの国で処刑はショーであった。鋸引きも釜茹でもそうである。人の心の奥底にそうした血を

好む一面があることは残念なことに否定出来ない。
今回の処刑は特別であった。何故なら処刑される者達はスペインの者達ではなかった。フランドルの者達なのである。
彼等は新教徒である。しかもフランドルの独立、スペインから見れば反乱の指導者達である。彼等の処刑はスペインにとって大きな意味があるのだ。
「陛下に逆らう奴等に死を！」
「思い上がったフランドルの奴等に神の裁きを！」
皆口々に叫ぶ。彼等にとって王と旧教こそが正義なのである。だからこそこの処刑を今か、今か、と心待ちにしているのだ。
「こら、そう慌てるな」
かえって兵士達がそれを宥める程である。
「落ち着いて待つがいい。そう焦らなくとも処刑は行なわれるからな」
彼等を指揮する将校の一人がそう言う。そして興奮する民衆を落ち着かせる。
民衆はその言葉に次第に落ち着きを取り戻した。やがて沈痛な葬送行進曲が鳴り響いてきた。
「来たな」
まず僧達が広場にやって来た。その後に楽隊が。そして兵士達に護送されて処刑されるフランドルの指導者達がやって来た。
「来たぞ、来たぞ！」
民衆はそれを見て再び興奮しだした。
「だから落ち着け、というのだ」
今度は僧侶達も彼等を落ち着けようと宥めだした。場は最早血への渇望に満ちていた。
僧達を指揮する司教が広場の中央にやって来た。フランドルの指導者達がその前に連れて来られる。
「神の掟を破った異端の者達よ」
司教は彼等に対して語りはじめた。

「今から汝等は神の裁きを受ける。そしてその罪の重さをとくと味わうがいい」
それはこうした異端審問でいつも語られる文句であった。
「しかし断罪の後で許しがある。汝等はその時に神のご加護にすがるがいい」
こうした文句は聞かされる側にとっては白々しいものでしかない。言う方にとっては単なるおためごかしである。そうした空虚な時間の後でフランドルの者達は火刑台の前に導かれた。
そこで晴れやかな曲が演奏された。その火刑式を見るスペインの要人達の入場である。
王妃をはじめとして王族や大貴族達が連なる。その中にはロドリーゴやエボリ公女もいた。
「・・・・・・・・・・」
ロドリーゴは表情にこそ出さないがその胸中は不愉快なものであった。彼にとっては自分の身体が焼かれるようなものであった。
公女はそれを見て何か言いたげであったが言わなかった。そして皆それぞれの場所で立ち止まった。
「さあ、陛下が来られるぞ！」
民衆はそれを見て言った。大貴族のうち一人が聖堂の扉の前にやって来た。そしてその扉の前で立ち止まった。
「さあ、聖なる扉よ、今こそ開かれよ！」
彼はそう言うとその扉に手をかけた。
「いかめしき聖堂よ、我等の王を出し給え！」
そして扉を開けた。その中からフェリペ二世が姿を現わした。
正装をし頭上には王冠をいただいている。そして僧達に囲まれゆっくりと下に降りてくる。それに対して身を屈めて一礼していた。
彼は設けられた自身の席の前に来た。そしてそこで皆に身体を向けた。
「顔を上げよ」
皆それに従い顔を上げる。

「皆の者、わしは神よりこの国と王冠を授けられた時誓ったことがある」
彼はゆっくりと語りはじめた。
「それはこの国に永遠の繁栄をもたらすこと、そして神の教えを守ることだ」
そう言うと一度言葉を切った。
「今ここにいる者達はその二つを破った。それにより今から神の裁きを受ける」
その言葉は重苦しくその場の全てを圧するものであった。
「だがこの者達にも慈悲はもたらされる。それはこの世ではないにしろ神は必ずどのような者に対しても慈悲を与えられるものなのだ」
それはフランドルの者を見て言っているのではなかった。彼は僧侶達、とりわけ司教をチラリ、と見た。
「それは忘れてはならない。そしてわしはその神とこの国に永遠の忠誠を誓おう！」
「陛下に栄光あれ！」
皆それを聞き口々に王を称えた。殆どの者にとってフェリペ二世は偉大な国王であったのだ。
「ははじめるがよい。苦しむことのないようにな」
彼は席に着くと司教に対して言った。彼はそれに対して恭しく頭を垂れた。
「王太子の姿が見えぬな」
王は隣りの席に座る王妃に対して言った。
「そういえば」
エリザベッタはそれに気付きハッとした。
「何処に行ったのだ」
彼は妃の表情を窺いながら尋ねた。やはり怪しんでいるようだ。
「まあ良い、そのうち来るだろう」
王はそう言うと顔を正面に向き直した。そこでは火刑の準備が行なわれている。

## 第三幕その五

「あ奴は昔からそうであった。どうも気ままなところがある」
彼は少し憮然とした表情でそう言った。
「母親を早くに亡くしたのが悪かったのかのう。やはり父親だけでは子は育たぬか」
「それは・・・・・・」
フェリペ二世も同じであった。彼も幼い頃に母親と死に別れている。以後彼は男の世界で育ってきている。
エリザベッタはそれについて言おうとした。だがその時であった。
「殿下が来られました！」
この場を守る衛兵達を指揮する将校の声がした。
「やっとか」
王はそれを聞いて言った。
「全く何をしておったのだ」
その直後彼は息子が何をしていたのか悟った。
「何・・・・・・」
彼はそれを見て思わず眉を顰めさせた。カルロは一人ではなかったのである。
その後ろにはある者達が続いていた。彼等はスペインの服を着てはいなかった。何とフランドルの服を着ていた。
（殿下、まさか・・・・・・）
ロドリーゴはそれを見て思わず顔を白くさせた。カルロは何とフランドルの者達をここに引き連れて来たのだ。
カルロは父王の前に来た。そして跪く。その後ろにいる者達もそれに倣った。
「太子よ」
王は重苦しい声で彼に対し尋ねた。
「わしの前でそなたと共に跪くその者達は一体何者だ！？」

「陛下の忠実なる領民達です」
カルロは顔を上げて答えた。
「わしのか」
王はそれを聞いて眉をピクリ、と動かした。
「立つがいい」
王はカルロとその者達に対して言った。皆それに従い立ち上がった。
「見たところスペインの者ではないな」
「はい」
「フランドルの服を着ているが」
「そうです、この者達はフランドルから来ました」
カルロは王の顔を見上げて答えた。皆その言葉に大いに驚いた。
「ほう、フランドルからか」
王はそれに対し感情を表に出すことなく応えた。
「一体フランドルから何用で来たのだ？」
「陛下に申し上げたいことがあるそうです」
カルロは彼等を代表して言った。
「何の用でだ！？」
彼は薄々は察していたが顔にはそれを出さずに問うた。
「王太子、いや我が子よ」
彼はあえてそう呼んだ。彼が話しやすいようにである。
「言ってみるがよい」
「わかりました、父上」
カルロは頭を垂れて答えた。そして話はじめた。
「今フランドルは血と涙に覆われております。どうかここにいる者達に対し慈悲を賜りますよう」
「今火にくべられようとしている者達に対してもか」
「それは・・・・・・」
カルロは後ろを見た。見れば火刑台にくくりつけられている。
（助けなければ）

彼はそれを見て意を決した。しかしそれは誤りであった。
彼は父の心を読み取れなかった。父である王は旧教の擁護者でもあるのだ。フランドルの者は救うことは出来ても火に入れられようとしている新教の者を救うことは出来ないのだ。それがわからないのは彼が若かったからだけではない。彼は自身の家のことも忘れていたのだ。
「お願いします」
彼は父に対して言った。
「陛下、ご慈悲を賜りますよう」
フランドルの者達も彼に倣って言った。
「・・・・・・・・・」
王は暫し黙っていた。カルロはその顔をジッと見ていた。
「ならん」
王は顔も首も動かすことなく言った。
「あの者達を許すことはならん」
「何故でしょうか！？」
カルロはそれを聞き血相を変えて問うた。
「わしに対しての不忠なら許そう。あくまで問い聞かすだけだ。しかし」
王は言葉を続けた。
「神に対する不忠だけはならんのだ」
「何故ですか！」
「カルロよ」
王は自身の子の名を呼んだ。
「そなたもわしの後を次ぎこのスペインの王となるならば、そしてハプスブルグの者のあらばわかるがいい。何故神に対する不忠が決して許されぬかを」
彼はそう言うと側に控える衛兵達に顔を向けた。
「そこにいるフランドルの者達を退けるがいい。話は後で聞いてつかわす故」

「ハッ」
兵士達は頭を垂れるとフランドルの者達を取り囲んだ。
「ならんっ！」
カルロは彼等の前に立ちはだかった。
「彼等を退けることは私が許さんっ！」
「殿下、ですがこれは・・・・・・」
兵士達は何時にない彼の頑なな態度に戸惑った。だが王はそんな彼に対して言った。
「カルロよ、席に着くがいい。あまり他の者を困らせるな」
「ですが父上っ！」
だがカルロはそれを聞き入れようとはしない。あくまで抵抗し衛兵達の前に立ちはだかる。
「陛下」
そこにエリザベッタとロドリーゴが進み出た。
「太子の仰ることももっともかと。ここはお慈悲を」
「・・・・・・・・・」
彼は妃を見た。その目は何かを疑っていた。
（やはりな）
彼はカルロを見るエリザベッタの目を見て何かを悟った。
「陛下、私からもお願いです」
そこにいる貴族達のうち何人かもそれに続いた。
「そうだ、殿下や王妃様の仰る通りなんじゃないか！？」
民衆の中にもそう言いはじめる者が現われてきた。
「父上、お願いです！」
カルロは形勢が有利になったと思いさらに言った。
「フランドルの者達に、今火にかけられようとしている者達に対してお慈悲を！」
「・・・・・・・・・」
だが王はそれに対し答えようとしない。その山の様に動かない頑なな態度はまるで彼がカルロに何かを見せようとしているかのよう

であった。
「陛下」
そこにある者達が進み出て来た。司教を先頭にした僧侶達だ。
「それはなりません」
彼等は王に対して言った。
「あの者達は神に対して不敬を働いたのです。それは万死に値します」
王はそれに対し顔を向けずに聞いている。顔はカルロに向けられたままである。

## 第三幕その六

「ましてや陛下に対してこのようなことを。すぐに裁きを下されるべきかと」
「下がれ」
王は彼等に対して言った。
「カルロよ、もう一度言おう」
彼は我が子に対して言った。
「ならん。その者達をすぐに下がらせるがいい」
「父上っ！」
「これは王としての命令だ。聞き入れよ」
彼はあえて低く、響き渡る声でそう言った。
「いえ、それは出来ません」
カルロはそれに対して首を横に振って言った。
「私は今こそ言いましょう。私にフランドルをお与え下さい、そしてその地に平穏をもたらしたいのです！」
「そなたは自分の言っていることがわかっておるのか！？」
彼はその言葉を聞き眉を少し歪めた。
「はい、私はその地で真の王となります」
「・・・・・・愚か者が」
王はそれを聞き腹の底から振り絞るように言った。
「そのようなことが出来ると思っているのか。そなたはハプスブルグを、このスペインのことを何も知らぬのか！」
彼は席を立った。そして激昂した声で息子を叱りつけるようにして言った。
「知っております！」
「知っていてそのようなことが言えるのか！」
「当然です！」
二人のその様子を見てロドリーゴとエリザベッタは顔を蒼くさせ

た。
（まずい）
二人は咄嗟にそう思った。カルロは次第に我を忘れだしていた。
「父上！」
彼は叫んだ。
「どうしてもフランドルの者達にお慈悲をお与えにならないのですか！」
「神に逆らう者には出来ぬと言っておろう！」
カルロはこの言葉の真意を理解できていなかった。そしてあまりにも興奮し過ぎていた。
「哀れなフランドルの者達よ！」
彼は後ろに、そして火刑台にいるフランドルの者達の方を振り向いた。
「私はこの身をかけて君達を救おう！」
そう言うと腰の剣を抜いた。帯剣はこの場では王以外は彼だけが許されていたのだ。
「な！」
それを見て皆驚愕した。彼は王と正対しているのである。
そして今言った言葉。王を殺そうとしていると思われても仕方がなかった。
「馬鹿者が！」
王は息子の思いもよらぬ行動に対しても我を忘れなかった。そして彼を一喝した。
「王の前で剣を抜くということが何を意味するのかわかっておるのか！」
「私は誓いました、この命にかえてもフランドルの者達を救うと！」
彼はまだ我を忘れていた。
「最早容赦出来ぬ、衛兵よ、この愚か者を取り押さえよ！」
王の命令が広場全体に響き渡る。だが兵士達は動けなかった。
「どうした、何をしておる！」

王の雷の様な言葉が再び響く。しかし誰も動けなかった。
相手は王太子、次の国王である。そのような人物に危害を及ぼすことは出来なかったのだ。
「そうか、誰も動かぬか」
王はそれを見て言った。
「ならばよい」
そう言うと腰から剣をゆっくりと引き抜いた。
「わしがこの愚か者を取り押さえよう」
惨劇が起こりかねなかった。王もカルロも引かない。互いに睨み合っている。皆その出来事に驚き動くことが出来なかった。そのまま父と子の惨劇が起ころうとしていた。その時だった。
「お待ち下さい！」
それはロドリーゴだった。彼は王とカルロの間に入ってきた。
「侯爵！」
一同は彼の行動にさらに驚いた。
「殿下」
彼はカルロに身体を向けた。そして言った。
「気をお鎮め下さい」
「ああ・・・・・・」
カルロはそこでようやく我に返った。彼の言葉でハッと気付いたのだ。
「そして剣をこちらへ」
「うん・・・・・・」
そして言われるまま剣を差し出した。ロドリーゴはそれを受け取ると王に差し出した。
「どうぞ」
一礼してそれを差し出す。王は無言で受け取った。
「何と鮮やかな・・・・・・」
「流石だ」
彼の評判は元々高かった。だがそれを見て皆さらに感服した。

「侯爵、よくやった」
剣を受け取った王は彼に対して言った。
「今の功績によりそなたを公爵に任じよう」
「有り難き幸せ」
ロドリーゴは頭を垂れた。カルロは衛兵達に取り囲まれた。
「連れて行け。頭を冷やさせるがいい」
「ハッ」
衛兵達は王の言葉に従いカルロを連れて行く。カルロは周囲を衛兵達に取り囲まれそのまま連行される。
「・・・・・・・・・・」
彼は完全に魂が抜けていた。呆然と歩いている。
(殿下・・・・・・)
ロドリーゴは暫し彼を見ていたが視線を外した。そして火刑台を見た。
フランドルの指導者達はそこに縛られた。そして今薪に火が入れられようとしている。
(私の全てを賭ける時が来たな)
彼は何かを決意した。そして席に戻った。
火が点けられた。フランドルの者達の苦悶の声が聞こえてきた。
それは炎と共に広場を覆い何時までも残っていた。

## 第四幕その一

第四幕　牢獄

新教徒達の処刑から数日経った。カルロは幽閉されたままである。処断はまだ下されてはいなかった。

宮殿の一室。ここは王の部屋である。

「朝がやって来たか」

椅子に座り書類に目を通していた王は窓の向こうが完全に白くなったのを見て呟いた。

「では蝋燭を消さなくてはな」

彼は自分の息で蝋燭を消した。

「朝が来るのは早い。わしはまた眠り損ねたのか」

彼は国内の全てのことに目を通していた。そしてその為には眠ることさえ忘れることがあった。

「だが今は眠りたい」

彼は疲れた顔で呟いた。

「王たる者に安息の日がないことはわかっている」

その声も憔悴しきっていた。

「だが合間で得られないとはどういうことなのだ」

彼は椅子から立ち上がり窓の向こうに鳴く小鳥達を見て恨めしそうに呟いた。

「小鳥でさえ愛を楽しんでいる。だがわしは」

彼は自分のベッドを見た。

「誰もいない。わしは愛というものを忘れてしまった」

彼は幼くして母を亡くした。そして二度結婚したがどれも妻は先に死んでいる。

「わしと結ばれた者はわしより先に旅立ってしまう。あのメアリーですら愛そうとしたのにわしより先に行ってしまった」

二度目の結婚のことを振り返る。

「あの者はわしを愛してはいない。心を閉ざしたままだ」
エリザベッタの顔を脳裏に浮かぶ。
「フランスの暗い森からこの太陽と共にあるスペインに来てもその顔は暗いままだ。そうとも、あの者が愛しているのはわしではないからな」
彼は再び椅子に座った。
「わしは愛を忘れたまま安らかな眠りにも着けぬ。この世に最後の審判が下るその日まで」
彼は壁にかけてある十字架に目をやった。
「神よ、何故このような苦しみをお与えになるのです。私は何時自分のマントに身を包んで安らかに眠れるのでしょうか。私は王といっても他の者と何ら変わるところはないのです」
憔悴しきったその声も次第に弱くなっていく。
「安らかに眠りたい。愛を思い出して」
そして彼はまどろみはじめた。
少しして小姓が部屋の扉を叩く音がした。
「ムッ」
彼はその音に気付き目を醒ました。
「入れ」
「はい」
小姓が入って来た。
「朝の用意ができました」
「わかった、すぐ行こう」
彼は部屋を出た。そして簡素な朝食を終えると王の間に入った。
「今日は大審問官が来られるのだったな」
王は側に控える大臣の一人に対して問うた。
「はい。もうそろそろ来られる頃だと思います」
彼は答えた。大審問官とはこのスペインの異端審問の最高責任者でありローマ法皇直属である。枢機卿に匹敵する権限を持っていた。
「そうか」

彼はそれを聞くと頷いた。やがて小姓が部屋に入ってきた。
「大審問官が来られました」
「お通ししろ」
暫くして白い法衣に身を包んだ小さな男がやって来た。左右を修道僧達に支えられている。
「わしは今何処にいるのだ？」
その白い法衣の男は言った。しわがれた老人の声であった。
「陛下の御前です」
僧侶の一人が答えた。大審問官は齢九十を越える。年老いて目は見えなくなっていたがその脳はまだ生きていた。
「そうか」
彼はそれを聞くと頷いた。そして顔を上げた。
皺だらけの顔であった。若い頃は美男子であったかも知れないが最早老いに支配された顔であった。だが独特の何とも言えぬ険しさが漂っている。それは宗教家というより罪人を裁く酷吏のものであった。
「よくぞ来られました」
王は彼に対し言葉をかけた。
「陛下ですな」
審問官はそれを聞き言った。
「はい。貴方のお知恵を授かりたくお呼びしました」
「左様で」
王はそこで周りに控える大臣や小姓、僧侶達に目をやった。
「下がっておれ」
そしてその場を下がるように命じた。皆それに従い去っていった。
「で、何についてご相談されるのですかな」
審問官は王に対し尋ねた。
「我が子カルロのことですが」
王は彼のことを話し始めた。
「フランドルの者達の肩をもつようになったのです。何処で入れ知

恵をされたのかわかりませんが」
「ほう」
「そして先日私の前で剣を抜きました」
「それについてですな」
「はい」
王は答えた。
「決まっておりますな、その処罰は」
彼はゆっくりと言葉を出した。
「王子はあのフランドルの者と結託し王の前で剣を抜いた。これは悪魔に心を奪われているのです」
「まさか」
彼とて悪魔を否定するわけではない。だが大審問官が自らの望まないことを考えていることをそこから悟ったのである。
「その様な者に対する処罰は一つしかありますまい」
「しかしそれは・・・・・・」
王はそれに対して口篭もった。
「父が子を殺すということになります。それは大罪です」
「陛下」
大審問官は冷たい声で言った。
「神は主を犠牲になされました」
「しかし・・・・・・」
「それが世の摂理です」
「世の摂理・・・・・・」
それは恐怖などではない、彼はそう考えている。だが大審問官は違っていた。
「正しき信仰こそが全てです」
「正しき信仰・・・・・・」
「そうです。陛下もそれはご存知の筈」
「確かに」
王は自分がこの男に逆らえないということをその時身に滲みて感

じた。審問官はそれを悟っているのかいないのか言葉を続けた。

## 第四幕その二

「このスペインには忌まわしいユダヤ人もイスラムの者もおりませぬ。ましてや異端の忌まわしい息吹も聞こえてはきませぬ」
どの者もカスティーリャとアラゴンの併合の時に追放されている。新教徒はあまりにも旧教の勢力が強い為入ることが出来なかったのだ。
「しかし今その異端の教えを持つ者がこの国に潜んでおります」
「誰ですか！？」
王は問うた。そのような者など心当たりがなかった。
「王子のことなどその者と比べれば小さなことです」
「？誰でしょうか」
王は益々わからなくなった。とりあえずはカルロを殺めずに済むと思いホッとした。
「本当にご存知ないか」
「はい」
そう答えるしかなかった。
「ではお答えしましょう」
彼はゆっくりと口を開いた。
「ポーザ公爵です」
「馬鹿な！」
王はロドリーゴの名を聞き思わず叫んだ。
「それは何かの間違いだ、彼はわし、いや私の・・・・・・」
王の声は明らかに狼狽したものであった。
「腹心でありましたな」
「はい・・・・・・」
王は落ち着きを取り戻して答えた。
「そこに問題がありますな」
彼は見えない目で王を見た。閉じられてはいるがそこには何故か

剣呑な光が感じられた。
「陛下は今まで孤独であられました」
「はい・・・・・・」
そうであった。王は至上の位、彼の他にこの位にいる者はこの国にはいないのだ。
「確かに私は今まで孤独でした」
それは彼もよくわかっていた。それに耐え、責務を果たすことこそ王の宿命だと思っていた。
「ですが・・・・・・」
それが変わったのはロドリーゴが現われてからであった。
「彼は私を常に助けてくれました。この宮廷、いや不毛な世界で唯一人・・・・・・」
「陛下」
審問官は再び彼を見て言った。その見えない目で。
「陛下の冠は神より授けられた至尊のものですぞ」
「それはわかっております。だからこそ私は・・・・・・」
「神と国、そして民の第一の下僕であると仰るのですな」
「はい」
王は息を呑む様な声で答えた。
「そう、陛下は神と主、そして精霊の第一の下僕であらせられる」
彼はここで巧みに旧教の定義を出してきた。これに逆らった者は今まで全て異端と断定されてきた。
「陛下と同列の方はこの世にはおられぬのです。それはよくご存知の筈ですが」
「その通りです」
彼はその言葉に逆らうことが出来なかった。王として、旧教を信じる者として。
「陛下、元に戻られればよいのです。陛下はこれまでその双肩でこの国を支えてきたではありませんか」
「そうですが」

だがそれに疲れてきた。責務を放棄するような彼ではないがその重みに次第に疲れてきたのだ。これは彼が次第に老いてきたせいもあろうか。

「このスペイン、そしてフランドルの為に申し上げましょう。ポーザ公爵を除きなされ」

「それは・・・・・・」

王はそれを拒もうとした。しかし。

「神の為です」

「・・・・・・・・」

それを否定出来なかった。スペインの王として、ハプスブルグ家の者として。

「このスペインは神の守られた国です。それを治める陛下にもそのご加護なくしては治められぬのはおわかりでしょう」

「そのご加護とは・・・・・・」

異端審問、そして僧侶達の横暴のことだ、と言おうとしたが言う事は出来なかった。スペインの僧侶達はドイツやフランスのそれと比べると腐敗は酷くはない。厳格なイエズス会の影響だがそれはそれで王にとっては厄介であった。今目の前にいるこの審問官の様に頑迷な人物を輩出してしまっているからだ。

「わしは先王にもお仕えしました」

「父上か」

壁にかけてある肖像画を見る。彼と殆ど同じ顔のその肖像画の人物こそ父カール五世であった。神聖ローマ帝国を、そしてこのスペインを支えた偉大な父だ。

彼は常に思っていた。自分はこの父より劣っていると。だがそれを拭い去る為に彼は今まで身を粉にしてスペインの為に働いてきたのだ。

「陛下は今先王に肩を並べられようとしております。今この国は世界の頂点にあります」

「父上に」

彼はその言葉に甘い囁きを感じた。
「だが私には彼の力が」
「必要ありませんな」
それに対して審問官は言い切った。
「先王も一人でこのスペインを支えられました。陛下にそれが為せぬ筈がありませぬ」
「そうは言うがな」
父カール五世も最後には力尽き全てを彼と自身の弟フェルディナント一世に譲り歴史の表舞台から退いた。その時の姿はそれまでの偉大な君主ではなく疲れきった一人の老人であった。

## 第四幕その三

「陛下」
審問官は痺れを切らしたのであろうか。強い声で言った。
「これは神の判断です。よろしいですな」
「わかりました」
彼は遂にそれを承諾した。これでロドリーゴの運命は決まった。
「よろしい。それでこそこのスペインの王です」
彼は満足した声で言った。そして法衣の中に入れていた鈴を出して鳴らした。すると先程の僧侶達がやって来た。
「それではこれで。吉報をお待ち下さい」
僧侶達に支えられ彼は王室を後にした。王はそれを見届けると力無く王座に座った。
「王の力なぞこんなものか」
彼は疲労に満ちた声で呟いた。
「神の名の前には全くの無力だ」
彼はその時父のことを思い出した。バチカンとルターの対立に巻き込まれた父のことを。
「父上もこのようなお気持ちだったのか」
暫く王座の上で力無く座っていた。だがやがて側にある鈴を鳴らした。
「はい」
小姓が入って来た。
「王妃を呼べ」
彼は小姓に対して言った。
「わかりました」
小姓は頭を垂れると部屋を後にした。そしてエリザベッタを連れて来た。
「ご苦労、下がっておれ」

彼は小姓を下がらせた。そして王妃と二人だけになった。
「妃よ」
王はエリザベッタを見下ろして言った。
「何故ここに呼ばれたかわかっているな」
「王太子のことでしょうか？」
「そうだ。彼との仲が最近いいようだが」
「はい」
彼女は薄氷を踏む思いで答えた。自分とカルロのことに気付かれたのであろうか。
「先日そなたの部屋からあるものが盗まれたそうだな」
「はい」
彼女の顔はそれで益々青くなった。
「それは一体何だ」
「それは・・・・・・」
エリザベッタは息を飲んだ。
「答えられぬか？」
「いえ・・・・・・」
心臓が潰れるようであった。それでも声を振り絞って答えた。
「小箱です」
「それはこれのことか」
王はそう言うと懐から一つの小箱を取り出した。
「！」
エリザベッタはそれを見て思わず気を失いそうになった。だが懸命に己を支えた。
「顔が青いな。大丈夫か？」
「はい」
これは王の誘導であった。彼女はそこに誘い込まれた。
「大丈夫なら問題ないな。これを開けてみよ」
「それは・・・・・・」
彼女は自分が逃れられぬ罠に陥ったことを悟った。

「どうした、出来ぬのか？」
王の言葉は続いた。恐ろしく冷徹な響きであった。
「そうか、出来ぬのか」
王はそこで言葉を収めた。一旦は。
「ならばわしが開けよう」
「えっ！」
エリザベッタはその言葉に顔をさらに青くさせた。最早蝋の様であった。王の手は彼女の目の前で無慈悲にその小箱をこじ開けた。
「これは・・・・・・」
王は小箱の中のものを取り出した。そして見た。
「王子の肖像か」
「はい」
観念したエリザベッタは顔を俯けて答えた。
「これはどういうことだ？」
王はそれを彼女に見せながら問うた。静かだが反論や言い逃れを許さぬ厳しい声である。
「彼は私の婚約者でした」
「だから持っていたというのか？」
「はい」
「今でも愛しいと思って」
「それは・・・・・・」
「違うというのか？」
王の言葉は彼女を捉え離さなかった。鉄の鎖の様にきつい束縛であった。
「陛下」
彼女はそれにあがらおうと決心した。そして顔を上げた。
「私をお疑いになられるのですか？」
「・・・・・・・・」
王はあえてそれに対して答えなかった。
「百合を司る家に生まれた私を」

ヴァロア家の紋章を出してきた。純潔の証でもあるそれを。
「百合か」
王はそれを聞き静かに言った。
「百合でも穢れることはあろうな」
その声は地獄の奥底から聞こえてくるようであった。
「そんな・・・・・・」
エリザベッタはその言葉と冷酷な口調に絶望した。
「清らかな百合にも虫はつく。否定出来るか？」
「はい・・・・・・」
彼女は死にそうな顔で答えた。
「私の操は神が証明して下さりますから」
「神か」
彼にそれを否定することは出来なかった。エリザベッタはそこまで考えてはいなかったが口に出した。
「ではそなたは地獄の門へ向かうのだな。フランチェスカ＝ダ＝リミニにように」
王はその冷酷な声を崩さずに言った。フランチェスカとか義弟との不義の恋の末に死した女性である。
「陛下・・・・・・」
彼女はもう完全に血の色を失っていた。
「答えてみよ」
「・・・・・・・・」
エリザベッタは答えようとしない。
「答えぬのか！？」
王は問い詰めた。
「お答えします・・・・・・」
彼女は顔を上げた。王はその顔に対して言葉を浴びせるように言った。

## 第四幕その四

「申してみよ、許してつかわす故」
言葉を続けた。
「そなたの不義を」
これが決め手であった。王妃はその場に崩れ落ちた。
「耐えられなかったか」
王はそれを一瞥した。
「所詮己の心を保てなかったということか」
言葉と口調こそ冷徹なものであったがその顔には哀しみが宿っていた。
「誰かいるか」
彼は再び呼び鈴を鳴らした。やがて小姓が入って来た。
「二人程呼んで参れ」
「わかりました」
やがてロドリーゴが入って来た。
「そなたか・・・・・・」
王は彼の顔を見て顔を暗くさせた。
「はい」
ロドリーゴは大審問官の心を知らない。そして王と彼の会話も知らなかった。だから王が何故顔を暗くさせたのか知らなかった。
「もう一人呼んだ筈だが」
「陛下、如何致しました？」
そこにエボリ公女が現われた。彼女とロドリーゴは一瞬視線を交えたがすぐにそれを逸らせた。王の前だという意識がそうさせたのである。
「これを見よ」
王は倒れている王妃を指差して言った。
「な・・・・・・！」

それを見てロドリーゴも公女も言葉を失った。
「公女よ」
王は公女に顔を向けて言った。
「そなたの申した通りであったな」
「それは・・・・・・」
彼女は顔を白くさせた。まさか自身の一時の憤りがこういった事態を招くとは。
彼女はカルロに対し怒り王妃に嫉妬しただけであった。それが王妃をここまで追い詰めるとは。
王妃は憎くはなかった。だが怒りが彼女を狂わせてしまったのだ。
（大変なことをしてしまった・・・・・・）
顔には出さまいとする。だがどうしても出てしまう。王はそれに気付いた。
「どうした、何かあるのか？」
「いえ・・・・・・」
「そうか。なら王妃を助けてやるがよい」
顔が青くなったのは倒れたところを見たからだと思った。そして彼女に対し命令した。
「わかりました」
彼女は王妃の側へ寄った。ロドリーゴもそれに続く。介抱は公女がしている。ロドリーゴはそれを助けている。
「陛下」
彼はそれを続けながら王に対して言った。
「何だ」
王はそれに対して煩わしそうに顔を向けた。
「一体何があったのかはわかりませんが」
彼はある程度は察していたがあえてそう言った。
「慈悲の心は常に心に留めて下さい」
「わかった。しかし・・・・・・」
王は苦しい表情で彼を見て言った。

「時にはそれをもってしてもどうにもならぬことがある」
それは他ならぬロドリーゴ自身にかけた言葉である。
「しかし・・・・・・」
ロドリーゴはその言葉の真意がわからない。
「言うな」
王はそれ以上の言葉を拒絶した。
「わかりました」
彼はそう答えるしかなかった。
「王妃様、お気を確かに」
公女は必死に彼女に声をかける。やがて彼女はゆっくりと目を開けてきた。
「気付かれましたか」
「はい・・・・・・」
まだ顔は白い。だがそれでもようやく我を取り戻せた。
「気を取り戻したか」
王はそれを見て呟いた。
「公爵」
王はロドリーゴに何かを言おうとした。
「はい」
彼はその場に畏まった。
「実はな」
何かを言おうとする。だがそれを急に止めた。
「いや、いい」
彼はそれを止めた。
「！？」
ロドリーゴはそれに不審なものを感じた。咄嗟に彼は今日の宮殿の来客のことを思い出した。
（そういえば・・・・・・）
あの盲目の老人のことが脳裏に浮かぶ。そして以前の王の言葉も。
（そういうことか）

彼は勘のいい男である。全てを察した。そして自らを待つ運命も。
(時が来たな)
彼は思った。
「ではわしは用があるのでな。これで失礼する。公女よ、妃を頼んだぞ」
「はい」
王はそう言うと部屋を後にした。ロドリーゴはそれを追う。あとには王妃と公女だけが残された。
「王妃様、大丈夫ですか」
「はい」
段々顔に血の気が戻ってきている。彼女は笑顔で答えた。
「公女、有り難うございます」
そして彼女は礼を言った。
「いつも助けて頂いて。何とお礼を言えばよいのか」
「いえ・・・・・・」
だが公女はそれに対して顔をそむける。
「どうしたのです?」
エリザベッタはそれを不思議に思った。
「私はお礼を申し上げているのに」
「私は・・・・・・」
彼女はそれに対し顔をそむけたままである。
「顔をこちらに向けて下さい。他人行儀する仲でもありませんし」
「王妃様・・・・・・」
「さあ、どうぞ」
彼女は顔をようやく向けてきた。
「どうしたのですか?貴女らしくもない」
王妃が普段の気の強い彼女を知っている。だから今の弱々しく何かに怯えている様子は不思議で仕方がなかったのだ。

## 第四幕その五

「あの、王妃様」
「どうしたのです！？本当に」
彼女は立ち上がった。公女も立たせた。
「仰って下さいな。私達の間に秘密は不要ですよ」
「はい・・・・・・」
その王妃の優しさと清らかな心が余計辛かった。
「王妃様に申し上げたいことがあります」
彼女は気を振り絞って言った。
「何でしょう」
「はい・・・・・・・」
言おうとする。だが言葉が出ない。それでも気を奮い立たせた。
「あの・・・・・・」
彼女は意を決した。そして再び口を開いた。
「私は罪を犯しました」
「罪とは？」
エリザベッタは不思議な顔をして問うた。
「はい・・・・・・・」
再び言葉が詰まりそうになる。だがそれを必死に抑えた。
「小箱のことですが」
彼女は語りはじめた。
「カル・・・・・・・いえあの小箱のことですか？」
「はい」
彼女は頷いた。
「あの小箱がどうしたのですか？」
「陛下がお持ちでしたよね」
「ええ」
エリザベッタの顔が再び青くなる。

「あの小箱を陛下にお渡しした者ですが」
「ご存知なのですか！？」
エリザベッタは少し顔を前に出した。
「はい・・・・・・」
公女の顔がまた青くなる。
「私です」
彼女は何時に無く弱々しい声で言った。
「今何と・・・・・・」
エリザベッタはその言葉を聞いて思わず耳を疑った。
「あの小箱を盗み出し陛下にお渡ししたのは私です」
「嘘ですよね」
エリザベッタは思わず問い詰めた。
「貴女がそんな・・・・・・」
「本当です」
彼女は言った。その青い顔が真実であると告げていた。
「何故・・・・・・」
「全ては私の愚かな憎しみと嫉妬の為」
「嫉妬・・・・・・」
「私もまた殿下を愛しております」
「そうでしたの・・・・・・」
エリザベッタはそれを責める気にはなれなかった。自分自身もそうだからである。
「私は殿下を愛しております。ですが殿下は・・・・・・」
「公女よ、もういいです」
エリザベッタは彼女に対して優しい声で言った。
「貴女があの人を想う気持ちはよくわかりますから」
「いえ」
公女はその許しを受け取ろうとしなかった。再び顔を背けた。
「公女、神は愛故の罪を咎めはしません。気を落ち着かれて」
「私はまだ罪があるのです」

「・・・・・・・・・」
エリザベッタはそれに対してあえて聞かなかった。彼女の言葉を聞こうと思った。
「私は・・・・・・」
言えない。わかっていた。これを言ったならば自身の破滅であると。
言葉が喉を出ない。どうしても言えない。身体が言葉を出すことを拒否していた。
しかし良心がそれに打ち勝った。彼女は言葉を出した。
「私は陛下のお情を受けておりました」
「そうですか・・・・・・」
エリザベッタはそれを聞き哀しい声で答えた。
欧州の宮廷ではよくあったことである。正妻がいながら寵妃を愛する。彼女の父アンリ二世はその最たるものであった。
「よくある話です」
彼女は現実を受け止めた。
「ですが」
しかしその顔は白いままである。
「私は貴女が陛下と共にいることを認めることは出来ません」
「はい・・・・・・」
彼女はその言葉を受け入れた。
「さようなら」
彼女はそう言うとその場を去った。あとには公女一人だけが残された。
「ああ・・・・・・」
彼女は一人になるとその場に崩れ落ちた。
「何もかもが終わってしまった・・・・・・」
彼女は王妃を愛していた。それは偽らざる真心からのものであった。
「全ては私の憎しみのせい・・・・・・」

そして自らの激しい心を呪った。
「それもこれも私の高慢故、そのもとはこの美貌・・・・・・」
悔やんでも悔やみきれなかった。激しい怒りと後悔が彼女の心を打ちすえた。
「その為に私は今全てを失った、そしてこの罪は決して消えはしない」
涙が流れた。赤い。血の涙であった。
「この赤い血も全てはこの美貌の為、これ程までにこの美貌を憎んだことがあろうか」
それは彼女の誇りであった。しかし今は憎しみの根源であった。
「もう私には何もない。何処かの修道院に入り静かに暮らすしかない。この罪を悔やみながら」
だが彼女はここで気付いた。
「いえ、まだ私には残っていたものがあるわ」
そして彼のことが脳裏に浮かんだ。
「殿下を、殿下をお救いしなければ」
王妃への想いを知られたならば、その末路は容易に想像できた。
「殿下だけはお救いしなければ」
彼女は立ち上がった。そして涙を拭いた。
「私はまだ全てを失ったわけではない、あの方だけはこの命にかえても！」
彼女は意を決した。そして王の間から姿を消した。

## 第四幕その六

カルロは父である王の前で剣を抜いてから牢獄に入れられていた。このスペインの継承者である為待遇は悪くはない。だが彼は鉄格子の中にいるのである。

「あれから何日が過ぎただろうか」

彼はふと思った。

「ここでは時間が進んでいることさえ忘れてしまう」

この牢獄は王宮の地下にある。彼はここに閉じ込められているのだ。

陽もささない。ただ薄暗く湿っている。そこはまるで闇の中のようであった。

「殿下」

そこに看守達がやって来た。

「食事かい？」

彼等がここに来るのは食事を運びに来る時だけである。

「ご面会です」

「私にかい！？」

「はい」

やがて一人の男が姿を現わした。

「ロドリーゴ！」

カルロは彼の姿を見て思わず声をあげた。

「お久し振りです」

彼の身なりは綺麗であった。そしてカルロを見る目も何処か哀しみに満ちていた。だがカルロはそれに気付かなかった。ただ友が来てくれたことを喜んでいた。

「私はもう駄目だ、おそらくこの牢獄の中で一生を終えるだろう」

彼はすっかり悲観しきっていた。

「殿下・・・・・・」

ロドリーゴはそんな彼を何時になく優しい声で呼んだ。
「御安心下さい、神は殿下を御守り下さいます」
「有り難う・・・・・・」
カルロはその言葉に微笑んだ。だが力のない笑みであった。
「けれど私は・・・・・・」
「救われます」
彼は言った。
「私はその為に来たのですから」
「君が・・・・・・」
「はい、あの僧院での誓いを覚えておられますね」
「当然だ、一日、いや一瞬たりとも忘れたことはない」
カルロは顔を上げて言った。
「有り難うございます。これで私も思い残すことはありません」
ロドリーゴは哀しみを笑みの中に包んで言った。
「私の理想、想い、いや全ては殿下の中に生き残るのですから」
「ロドリーゴ、何を言っているんだい！？」
カルロはそれを聞いて不吉なものを悟った。
「今日は一体どうしたんだい！何か妙なことばかり言っているけれど」
「妙なことではありません」
彼は言った。
「私は幸福でした。殿下とお会いできてしかも私の全てを受け継いで下さるのですから」
彼は言葉を続けた。
「その殿下をお救いできた。私は今までこの世に生きた者の中で最も幸福な者でした」
「ロドリーゴ！」
カルロはその話を止めさせるように叫んだ。
「止めるんだ、今日の君は一体どうしたんだい！？不吉なことばかり言って」

彼は震えていた。
「殿下」
ロドリーゴはそんな彼を落ち着かせるような優しい声で言った。
「私は殿下に降り懸かる災厄を退けました」
「災厄！？」
「はい、私は殿下の楯となったのです」
彼は毅然とした声で言った。
「楯って・・・・・・まさか！？」
カルロはその言葉にハッとした。
「そうです、おわかりになられましたね」
「そんな馬鹿なことがある筈がない！」
彼は叫んだ。
「いえ、本当です」
ロドリーゴは静かな声でそう言った。
「私はもう陛下に仇なす反逆の徒、フランドルを煽動した謀反人なのです」
「父上も君のことはよく知っている、それは嘘だ」
「陛下だけがこのスペインを統べられているわけではありません」
「そんな筈が・・・・・・」
カルロはそういったところで気付いた。
「そうか・・・・・」
そして鉄格子を掴んだまま項垂れた。
「殿下もまた彼等に命を狙われておりました」
「私の命なぞどうでもいい」
彼は首を横に振ってそう言った。
「そういうわけにはいきません。殿下はこれからのスペイン、そしてフランドルにとって欠かせぬお方なのですから」
「ロドリーゴ」
カルロは顔を上げた。
「もし彼等が君の命を狙っていても誰がそんなことを信じるのだ！

？」
「彼等にとっては神だけが全てです」
「証拠は！？何もないじゃないか」
「あの者達にとって証拠は必要なものでしょうか！？」
「いや・・・・・・」
それは彼もよくわかっていた。異端審問に際して最も重要なことは疑われないことである。証拠は不要なのだ。何故なら神が全ての証拠なのだから。そして多くの罪無き者達が惨たらしい拷問と燃え盛る炎の前に消えていった。このスペインはまだましであった。彼等の同胞である神聖ローマ帝国はその叫び声で満ち燃え盛る炎の煙で天は暗黒に覆われていたのだから。

## 第四幕その七

「それに証拠もあります」
「何処に・・・・・・」
「私の屋敷にです。殿下から頂いた書類を私の屋敷に置いておきました。今頃は彼等がそれを押収していることでしょう」
「何故そんなことを」
「全ては殿下の為」
彼は静かに短く、そして強い声で言った。
「私に全ての罪がかけられます、殿下には誰も危害を加えられないでしょう」
「そんな・・・・・・」
カルロはそれを聞き再び頭を落とした。
「私には君が必要なのに、永遠に」
「御安心下さい、私は永遠に殿下の中で生きます」
その時だった。階段を二人の男が降りてきていた。
「公爵はここだな」
彼等は小声で話していた。
「ああ、王子も一緒だ」
二人は異端審問官の漆黒の制服を着ていた。細部は赤く装飾されている。まるで血の様な赤だ。それは彼等に殺された罪無き人々の血であろうか。そしてその黒は闇、人の心の闇の黒なのであろうか。
一人はその手に銃を持っている。既に火が点けられている。
「王子はいいのだな」
「大審問官様からご指示があった。王に免じ今だけは生かしてやれと」
「今だけは、か」
「そうだ。しかし次におかしなことをしたならば」
「わかっている」

そして二人は下に降り立った。カルロもロドリーゴもそれに気付かない。
「準備はいいな」
「うむ」
銃を持つ男が構えた。そして引き金に指を入れた。
「ん！？」
カルロはその時ようやく誰かやって来たことに気付いた。
「ロドリーゴ」
そしてロドリーゴに声をかける。だが全てが遅かった。
引き金が引かれた。銃口に光が宿り死が放たれた。雷の様な音が鳴り響きロドリーゴを撃った。
それは彼の背を撃った。心臓のところだった。彼は一度大きくのけぞり鉄格子に倒れ込んだ。
「ロドリーゴッ！」
彼は叫んだ。そして友を助けようとする。
「クッ！」
だが鉄格子は開かない。そこにロドリーゴの手から一個の鍵が落ちて来た。
「私を助ける為に・・・・・・」
カルロはまたもや彼の深い心に涙を落とした。だが今は感慨に耽っている暇はなかった。
「だが今度は私が君を助ける番だ」
そして鍵を取りそれで鉄格子を開けた。そして友の仇を追おうとする。
「待てっ！」
だが彼等はもういなかった。既に階段を昇り何処かへ姿を消していた。
「クッ、異端審問の者達か、それとも・・・・・・」
彼は歯噛みした。だが追うのを諦め倒れている友に目をやった。
「ロドリーゴ、大丈夫か」

彼を抱き起こす。だが彼は既に血の海の中にあり彼の顔は蒼白となっていた。
「殿下、お聞き下さい」
彼は自身の血に塗れた手でカルロを抱き締めた。
「このように血に塗れた身体で申し訳ありませんが」
「そんなことはない」
カルロは首を横に振って答えた。
「君の熱いこの血、今こそ全て受けよう」
「有り難うございます・・・・・・」
彼は力ない笑みで微笑んでそう言った。
「明日ユステの僧院へお向かい下さい。そこに王妃様がおられます」
彼はここに来る前に既に王妃と会っていたのだ。
「王妃様は全てをご存知です。必ずや殿下をフランドルへお渡しなさるでしょう」
「そこまで手を打ってくれていたのか」
「はい・・・・・・」
彼は弱々しく頷いた。
「それが私の務めですから」
彼は言葉を続けた。
「そしてそこからスペイン、そしてフランドルは新生するのです。殿下の手によって」
「私の手で・・・・・・」
「そうです、私はそれを何時までも見守っていますよ、殿下の中で」
彼はうっすらと微笑んだ。一言ごとに力が弱くなっていっているのがわかる。
「私は愛する殿下をお救いすることが出来ました。そしてそれによりスペインも、フランドルも救われる。それで本望なのです」
「ロドリーゴ・・・・・・」
「長い苦悩の人生でした。戦場で、宮廷で多くの血を見てきました」
宮廷もまた権謀術数の中にある。彼は神聖ローマ帝国の大使を勤

めていた頃やイングランドの大使を勤めていたことがある。そこで多くの血が流れるのを見てきたのだ。
「ですが最後に殿下にお会いできた。私の苦悩は殿下により救われたのです」
「私に・・・・・・」
「はい、その殿下の為に死んでいく、私は幸福でした」
「有り難う・・・・・・」
カルロは泣いていた。
「泣かれることはありません、私達はこれでずっと一緒です」
そして首のペンダントをとりカルロに手渡した。カルロはそれを受け取った。
「さようなら、ですが私は永遠に貴方の中に生きます」
「うん・・・・・・」
カルロは頷いた。
「ですから悲しまないで下さい。私は貴方と共にありますから」
そう言うとその目をゆっくりと閉じた。
「私は永遠に貴方と共に・・・・・・」
そして静かに息を引き取った。
「ロドリーゴ！」
カルロはその上に倒れ伏した。牢獄から悲しい慟哭が聞こえてきた。

## 第四幕その八

やがてカルロは牢獄から出て来た。その背にはロドリーゴを背負っている。
「カルロよ」
王は中庭にいた。その周りを宮廷に仕える貴族達が取り囲んでいる。
「そなたの罪は許された。わしに剣を向けたことも全て許そう」
「・・・・・・・・・」
カルロは父王のその言葉に答えようとしない。
「公爵はその罪の報いを受けた。だがそなたを救い出した功によりそれも許そう」
「彼の命を奪っておきながらですか！？」
カルロは顔を上げた。
「父上、いえ陛下」
彼は王を睨みつけて叫んだ。
「公爵、いえロドリーゴのことは貴方もご存知だった筈です、それを何故処刑人達に投げ与えたのですか！？」
「それは・・・・・・」
王は答えられなかった。彼もまたロドリーゴを救いたかったのだ。だがそれは出来なかった。彼が全知全能ではない人間であるが故に。
「彼は私の為に全てを捧げた、そして貴方にも。それをわかっていながら何故・・・・・・」
「そなたにもそのうちわかる時が来る」
彼は力なくそう言った。
「そんなものわかりたくもない！」
彼はヒステリックに叫ぶようにして言った。
「彼は私の為に死んだ、全てを捧げてくれた」

彼は父王を睨んだままである。
「それは貴方に対しても同じだったというのに・・・・・・・」
「それはわかっていた・・・・・・」
「私は決めました」
担ぐロドリーゴの死に顔を見ながら言った。
「彼の志を受け継ぎます」
「そうか・・・・・・」
最早それに対し反対するつもりはなかった。彼自身は。
「そなたも運命に従うか」
王は悲しい声で言った。
「それが私の運命ならば」
「わかった・・・・・・」
カルロの運命もまたこの時決まった。だがカルロはそれを知らない。
「公爵」
王はカルロが担ぐロドリーゴの亡骸を見た。
「今までご苦労だった。せめて手厚く弔ってやろう」
そう言うと左右の廷臣達に目配せした。
「彼を大切に扱ってくれ」
「わかりました」
彼等も悲しかった。この宮廷でロドリーゴ程人望があり心優しい男は他にいなかったのだ。
「殿下」
彼等はカルロに歩み寄った。
「公爵のことは我等にお任せ下さい」
「わかった」
カルロは大人しくそれに従った。ロドリーゴは彼等に委ねられその場を去った。
「ロドリーゴ・・・・・・」
彼はそれを見えなくなるまで見送っていた。

「君は永遠に私の中で生きる。見ていてくれ」
そして父に対し向かい直った。
「今一人の英雄がスペインを去りました」
「うむ」
王は力なく頷いた。
「ですが彼の心は私に受け継がれました。それが何を意味するか」
「わかっておる」
王は言った。
「だがそれでそなたの運命は・・・・・・」
続きを言おうとした。その時であった。
不意に早鐘が鳴った。それは危急を知らせる鐘であった。
「何事だ！？」
王は咄嗟に身構えた。
「陛下！」
中庭に小姓達がやって来た。
「どうしたことだ！？」
王は彼等に対し尋ねた。
「大変です、宮中に民衆が雪崩れ込んで来ました！」
「何っ！」
これには王だけでなくその場にいた全ての者が驚いた。
エリザベッタも侍女達に護られやって来た。異端審問官達もいる。
「彼等がロドリーゴを・・・・・・」
カルロは彼等を見て激しい怒りを感じた。だが今はそれどころではなかった。
「陛下よ、これは如何いたしたのですかな？」
大審問官もいた。彼は相変わらず左右を支えられている。
「何、愚か者共が騒いでいるだけです」
王は怖れることなくそう答えた。
「殺せ！殺せ！」
中庭は頑丈な扉によって守られている。その向こうから怒鳴り声

が聞こえてきた。
「来たか」
王はそれを聞き落ち着いた声で言った。
「まずい・・・・・・」
だが他の者は皆蒼白となっている。カルロも身構えている。
「皆の者、案ずることはない」
王は彼等に対しそう言った。
「扉を開けよ」
小姓達に言った。
「しかし・・・・・・」
彼等は青くなってそれを拒もうとする。
「これは王の命令だ」
彼は反論を許さなかった。彼等は震えながら扉に向かう。扉は今叩き壊されようとしていた。

## 第四幕その九

扉の栓が落とされた。すると民衆が雪崩れ込んで来た。
「よし、進め！」
彼等は手に得物を持っていた。そしてその顔は殺気立っている。
「何処に進むというのだ？」
王は彼等の前に進む出て言った。
「う・・・・・・」
彼等は王の姿を認めて動きを止めた。
「わしの後ろには何もないぞ」
彼は民衆達と正対してそう言った。
「わしの他には何もない。そなた等は何を求めているか」
「それは・・・・・・」
彼等は立ち止まった。
「わしを殺すつもりならそうするがいい。だがわしが死してもこのスペインは揺るがぬ」
彼は毅然として言った。
「そしてもう一つ言おう、わしは暴徒達の刃には屈さぬ。さあ愛する民達よ、そなた達は暴徒なのか！」
王は雷の様な声で問うた。民衆はその威厳の前に折れ得物を投げ棄てた。
「陛下の民です！」
「そうか」
王は彼等のその姿を見てそう言った。
「ならば良い。わしの冠はそなた等を罰する為にあるのではない」
彼は静かに言った。
「悪しき者を討ちスペインと民を護る為にあるのだ」
そう言うと彼等を一瞥した。
「落ち着くがよい。そなた等に罪はない」

「わかりました・・・・・・」
流石は一国の王であった。彼はその威厳だけで猛り狂う民衆を落ち着かせたのだ。
「これが王か・・・・・・」
カルロもそれは全て見ていた。そして何かを悟った。
「私も王というものを学ばなければ」
「陛下、お見事です」
大審問官が王の前に進み出てきた。
「これも神のご加護です」
「はい」
王は答えた。
「民達よ」
王は彼等に対し言った。
「すぐにこの宮殿を去るがいい。そなた等は罪に問われることはない故安心するがいい」
「わかりました」
こうして宮中での暴動は幕を降ろした。そして民衆達は街に帰りロドリーゴは棺に入れられた。血の一日はこれでようやくその幕を降ろした。
その日の夜である。エリザベッタは一人密かに宮殿を出ていた。そして夜の闇に紛れ何処かに向かおうとする。そこに誰かが声をかけてきた。
「誰です！？」
彼女は咄嗟に身構えた。
「私です」
それはエボリ公女であった。
「貴女は・・・・・・」
「今日の騒動ですが」
「民達が宮中に入って来た騒ぎですね」
「はい」

彼女は答えた。
「殿下はあれで助かったでしょうか？」
「そうでしたか、貴女が手引きされたのですね」
「そうです、全ては殿下をお救いする為」
彼女は強い顔で頷いた。
「殿下はご無事でしょうか？」
「はい、ポーザ公爵が命を賭けてお救いになられました」
「公爵が・・・・・・では私のしたことは・・・・・・」
「その心は神に伝わりました」
エリザベッタはうなだれようとしていた公女に対して言った。
「え・・・・・・」
「その心は伝わりました。カルロは明日私と会います」
「御気をつけて」
公女は感謝した表情でそう言った。
「異端審問官達が捜しておりますから」
「その様なものもう怖くはありません」
彼女は毅然として言った。
「ポーザ公爵は命を賭けてあの方を救われました」
彼女もまたロドリーゴの心がわかったのだ。
「そして貴女も全てを賭けてあの方の為に動かれました」
この煽動は異端審問官達に感づかれれば命にかかわる。公女はそれでも動いたのだ。
「そして私も」
彼女は言葉を続けた。
「あの方の為、フランドルの為に行きます、あの聖堂へ」
「王妃様・・・・・・」
公女はそれを聞いて頭を垂れた。
「これが永遠の別れになるかも知れません」
彼女はそう言うと公女に顔を向けた。
「ご機嫌よう」

「はい・・・・・・」
エリザベッタも全てを棄てた。実に澄みきった表情となっていた。
公女はそれを見送った。そして夜の世界にその姿を消していった。

## 第五幕その一

第五幕　別れの聖堂

エリザベッタは聖堂にいた。そしてカール五世の墓の前に来た。
「偉大なる先王よ」
彼女はその前に跪いた。
「貴方はこの世の全ての空しさをお知りになられています」
カール五世は最後の最後で裏切られ神聖ローマ帝国の皇帝を退いている。
「そして今はこの僧院へ永遠の平安の中におられます」
顔を上げた。
「私も何時か、いえ近いうちにそのお側に」
既にこの世での幸福は諦めていた。
「あの美しき祖国を離れ今はこのスペインにおります。しかし」
言葉を続ける。
「フォンテブローでの出会いを忘れたことはありません！」
カルロとのはじめての出会いのことが脳裏に甦る。
「あの森で私達は永遠の愛を誓った。しかしそれは叶わなかった」
彼は王の妃となった。
「このスペインの美しい太陽も花に囲まれた庭も私の心を癒してはくれない。私をこの世に繋ぎとめる絆ももう消えてしまった」
絆、それは心の希望であった。
「今の私に残された仕事は只一つ、それが終われば私は・・・・・・」
そう言ってうなだれた。
「神の御許へ旅だちとうございます」
そして立ち上がった。そこにカルロがやって来た。
「ロドリーゴの言った通りだ。本当にここにいるとは」
「来たのね」

エリザベッタはカルロに顔を向けた。
「はい、旅立つ前に会いに来ました」
「これが永遠の別れ」
エリザベッタは強い声で言った。
「それは誓っています。心の中にいるロドリーゴと共に」
カルロの声も力強いものであった。
「決められたのですね」
「はい」
カルロは頷いた。
「フランドルの地に彼の身体は眠ります。そして心は永遠に私と共に」
「彼も喜ぶことでしょう」
ロドリーゴの遺体は今棺の中にある。カルロはそれを既にフランドルへ向かう船の中に入れておいたのだ。
「彼の身体はフランドルの土となります。その墓はどのような王の墓よりも素晴らしいものとなるでしょう」
「公爵・・・・・・」
エリザベッタはそれを聞くとロドリーゴが全てを賭けたことが報われたと感じた。
「その周りを美しき花々が取り囲みます」
「まあ・・・・・・」
「そして彼の墓を作った後私はフランドルを生まれ変わらせます」
カルロは顔を上げた。上を見た。
「炎によって焦がされた空、血に濁った川、廃墟と化した町や村」
彼の脳裏に荒れ果てたフランドルの地が浮かぶ。
「それを全て変えます。フランドルの民達は私が救います」
「それこそが公爵の望み・・・・・・」
「そうです、貴方は私がフランドルで為すことを伝え聞いて下さい」
(それは神の御許で)
エリザベッタは心の中でそう呟いたが口には出さなかった。

「貴方とはこの世では永遠の別れ」
彼女は言葉を替えてそう言った。
「ですが別の世界ではまたお会いしましょう。今度はこの世の惨たらしい運命などない心優しき世界で」
「はい」
カルロはまた頷いた。
「私達はまた会うでしょう、そしてその時こそ永遠の愛を結ぶ時」
「ええ」
「また会う時まで」
二人は手を取り合った。
「永遠のお別れを」
そして手を離した。それが二人の別れであった。
カルロは聖堂を出ようとする。そして行く先はフランドルだ。
だがその前に影が現われた。不吉な影達であった。
「ム・・・・・・」
カルロはその影達を見て腰の剣に手をかけた。
それは異端審問官達であった。彼等はカルロを取り囲んだ。
「ロドリーゴの仇か」
彼の目が光った。
「望むところだ、貴様等だけは神の裁きを受けさせてやる」
そして斬りかかろうとする。だがその時だった。
「待て」
そこであの声がした。
「あの時言った筈だ」
「父上・・・・・・」
フェリペ二世が姿を現わした。
「フランドルに行くとなれば命はないと」
「貴方はまだそんなことを・・・・・・」
カルロは顔に怒りをあらわさせた。
「言うな」

王は一旦カルロから顔を外した。
「これは王としての勤めなのだ」
そして再びカルロを見た。
「ロドリーゴをなくしておいてまだそのようなことを！」
「言うな！貴様には所詮王冠の重さがわからんのだ！」
「そんなものわかりたくもない！」
カルロは言い返した。
「ロドリーゴがその為に命を捨てる位なら！」
「クッ・・・・・・！」
王は言葉を返せなかった。ただカルロが睨むのを睨み返すだけであった。
「陛下よ」
そこで別の声がした。大審問官である。
「今こそ王の尊厳を確かなものにする時ですぞ」
彼はやはり左右を他の者に支えられながら出て来た。
「そのような者の力を借りなければいけない王冠なぞ・・・・・・」
カルロは大審問官を睨みながら言った。

## 第五幕その二

「そんなものは本当の王冠ではない！」
「貴様は何もわかっておらんのだ！」
王は息子に対して叫んだ。
「貴様はスペインを、ハプスブルグを何一つとしてわかってはおらん。フランドルのこともな」
「いや、違う。私は・・・・・・」
カルロはそれに対し首を横に振った。
「どう違うのだ！？」
王はそれに対し問い詰めた。
「答えてみよ」
「それは・・・・・・」
カルロは言葉をとぎらせた。
「言えぬか」
「いや、言える」
カルロは再び言葉を発した。
「私の王冠、それは・・・・・・」
カルロは言葉を続けた。
「スペインだけ、旧教の為にだけあるのではない、フランドルにも、新教にもあるものなのだっ！」
「やはりわからぬか」
わからないのは王なのだろうか、カルロなのだろうか。それはこの場にいるどの者にもわからなかった。だが王はカルロを指差して言った。
「かかれ」
その言葉に従い異端審問官達は武器を取り出した。
「来たな」
彼等は建前上殺生を禁ずる僧侶であるので剣や斧は手にしていな

い。だがその手にはメイス等がある。
そして武器はそれだけではなかった。彼等の後ろには神という権威さえあった。カルロはそれを見た。
「貴様等の言う神とは」
異端審問官達の無気味な眼を見た。酷薄で血に餓えた眼だ。
「悪魔だっ！それは貴様等の心の中にいる！」
「言うかっ！」
大審問官は叫んだ。彼の逆鱗に触れてしまったのだ。
「捕らえよ、いや、この場で神の裁きを与えるのだ！」
王の声よりそれは強いものであった。
「これで終わったな・・・・・・」
王は息子から目を離した。全ての終わりを悟った。
「ああ・・・・・・」
エリザベッタもだ。彼女も目を伏せた。
「私は死ぬわけにはいかない」
カルロは迫り来る異端審問の黒い服を前に言った。
「私の中にいるロドリーゴの為に」
そして剣を振るう。異端審問の者達を斬り伏せていく。
「やりおるの」
大審問官は剣が人の身体を切る音を聞いて呟いた。
「だがそれも限度がある」
その通りであった。カルロは一人、だが異端審問の者達は何人もいるのだ。
「一人で神にあがらうその愚かさ、身を以って知れい！」
閉じられていたその目が開いた。眼球は既に白濁している。だがそこには明らかに何かが映っていた。
（それはもしや・・・・・・）
王もまたカルロと同じことを思った。この老人が見ているもの、それは神ではなく神の姿をした悪魔なのではないかと。しかしそれを口に出すことは出来なかった。

（それがわしの限界か）
王はそれを痛感した。しかし目の前の自身の子はそれに捉われない。
（惜しいことをした）
カルロは果敢に剣を振るう。
（そうとわかればわしの手の届かぬところで思う存分その力を養わせ使わせてやったものを）
彼は後悔した。そして唇を噛んだ。
（わしのように王冠を被りながらもそれに支配されるのではなくその王冠でもって全てを乗り越えられたのに。その者をわしは今消してしまおうとしている）
カルロの剣が鈍ってきた。もう何人斬り伏せたことだろうか。異端審問の者達は彼を取り囲んだ。
「さあ、もう逃げられんぞ」
大審問官はほくそ笑んだ。彼は耳で全てを感じていた。
「潔く裁きを受けるがいい」
「クッ・・・・・・」
肩で息をしている。もう限界であった。剣も血糊で真っ赤となっている。
「カルロ・・・・・・」
王もエリザベッタも顔を向けた。見ないではおれなくなった。
「まだだ」
彼は言った。
「まだ私は倒れるわけにはいかない。ロドリーゴの為にも」
そして剣を振るう。しかしその動きはもう今までの冴がなかった。
「無駄だ、諦めよ」
大審問官はその剣の音を聞いて言った。
「全ては裁かれる時が来たのだ」
「まだだ、フランドルへ行くまでは・・・・・・」
剣で切れなくなると今度はそれで殴った。あくまで戦うつもりだ。

「させんっ！」
剣で一人を叩いた。だがそれも遂に折れた。
剣の折れた半分が中空を舞った。そしてそれは回転し床に落ちた。
乾いた音を立てて転がる。
「折れたか・・・・・・」
カルロはそれを見て呟いた。
「これで終いだ」
王は言った。エリザベッタの顔が蒼白になる。
「さあ、今までよく手こずらせてくれた」
大審問官はその音が収まったのを聞いて再び口を開いた。
「今こそ裁きを受けるがいい」
カルロを囲む輪が狭まった。
「まだだ！」
しかしカルロは諦めない。その両腕を振るう。

## 第五幕その三

「この身が朽ちようが私は諦めない！」
「まだ諦めぬか」
大審問官は舌打ちした。
「殺してしまえ！」
カルロを指差して言った。だがカルロは彼等を投げ飛ばし抵抗を続ける。
「これも公爵への想いか」
王はそれを見て言った。カルロを支えているものの強さをその時知った。
だがカルロも限界にきていた。やがてメイスが掠った。
「ウッ・・・・・・」
彼の頬を血が伝う。その時だった。
「待つがいい」
カルロの後ろの聖堂の中の鉄格子が開いた。
「何」
その声にまず反応したのは王と大審問官であった。
「鉄格子が開いた・・・・・・・！？」
一同は動きを止めた。中から再び声が聞こえてきた。
「それまでだ」
そして鉄格子の中から誰かが姿を現わした。
「なっ！」
それを見た王の顔が蒼白となった。
「まさか・・・・・・」
そこにいるのは王と瓜二つの顔を持つ男であった。面長で黒い瞳は丸い。鷲鼻を持ち厚い唇の下は突き出ている。髪は黒くその上に金の王冠を被っている。黄金色の甲冑と白いマントに身を包んだその者を知らぬ者はこのスペインにはいなかった。

「父上・・・・・・」
彼が父と呼ぶその男、彼こそカール五世であったのだ。
「まさか本当にここにおられるとは・・・・・・」
エリザベッタも異端審問の者達も驚愕した。カルロはその前に立っていた。
「カルロ、我が孫よ」
彼はカルロに近付いて言った。
「そなたの幸福、そして王国はこの世にはない」
彼は厳かな声でそう言った。
「そなたがいるべき場所はここではない。私がそなたが本来いるべき場所に誘おう」
そう言うとカルロの身体をその白いマントで包みにかかった。
「来るか」
「はい・・・・・・」
カルロはそれに対し頷いた。
「ならば来るが良い。そなたが愛する者もそこにいる」
「ロドリーゴ・・・・・・」
「そうだ」
それが彼の最後の言葉であった。彼の身体は祖父のマントに覆われた。
「では行こう。神のおわすあの世界に」
カール五世は静かに言った。そしってそのままゆっくりと後ろに下がる。
「これは一体どうしたことじゃ・・・・・・」
大審問官は驚きの声で呻いた。
「皇帝陛下がこの世に現われるなどと」
「奇跡なのか・・・・・・」
王は呻いた。その間に王は聖堂の自らの墓所の中に消えていた。
「さらばだ」
それが最後の言葉だった。王の気配が消えた。

「父上はカルロを・・・・・・」
王は呟いた。その時鉄格子が閉じられた。
鉄の音がした。そして全てはその中に消えた。
「・・・・・・・・・」
王は沈黙した。だがゆっくりと口を開いた。
「これが神の、そして父上のご意志だ」
「先王の・・・・・・」
我に返ったエリザベッタが言った。
「そうだ、カルロはそれにより救われた」
王は静かに言った。
「しかし・・・・・・」
ここで言葉を濁らせた。
「我々はその救いを得られはしない」
それが全てであった。
「偉大なる皇帝、威厳あまねきあの方も今はただ神の御許に」
何処からか声がした。それはそこにいるせべての者の心に響いた。
鐘が鳴った。カルロとロドリーゴに向けられた祝福の鐘であった。

ドン＝カルロ　　完

２００４・５・９

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3340f/

ドン＝カルロ

2011年4月28日00時36分発行